ＩＳに変革者・・・の怠け者

紅刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳに変革者・・・の怠け者

【Ｎコード】
Ｎ７４６９Ｙ

【作者名】
紅刹那

【あらすじ】
入学式に向かう途中電車にはねられて死んでしまった大学生がＩＳの世界に転生するお話です。
処女作＆駄文しか書けないので精進していきます。

プロローグ

（だるい・・・）

３月４日　電車の中には、周りはスーツを着ているサラリーマンや新学期だ、と言っている学生がいたりする。その中で外を眺めている１８歳の青年はぼやいていた。

彼は、普段電車は使わず自電車で中学から高校まで、通学していたが今年から大学生で今スーツを着ている。彼は大学の入学式に行く途中なのだが、新たな期待に胸を含まらせるとかではなく、入学式がただめんどくさいと考えていた。だって長ったらしい校長のあいさつなんて嫌だろ？

どうやって長ったらしい校長のあいさつを潰すか考えている木村（きむら）暁（あきら）であった。

（どうしようかな…あ、ここで乗り換えだ）

電車から降り　階段を上がり　視覚障害者誘導用ブロックの所で電車が来るのを待つ

（あ　きたきｔ「ドゴッ」・・・・・・・え？）

突然後ろから押さて落とされる感覚におちる、そして、目を動かすと電車が猛スピードで・・・

ん？

辺りを見渡してみるが、そこには電車もなく駅のホームでもなく、ただ白いペンキを天井・床・壁に隙間なく塗ったような空間の中で、白い布のような服（ギリシャの神の服のような）を着た女性がいた。

そして、

「すいませんでしたあああああ━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━！！！」

いきなりうるさい人だな

「すいません…」

しょぼくれた、そして心読まなかったか？

「一様神様なんで、実はこちらの不手際であなたが死んでしまったんですよ。」

へー　後ろから押されたけどあれのこと？

「はい…」

へー

「怒ってないんですか？」

怒れば生き返えさせてもらえたりするの？

「あなたの体は、グシャッっとつぶれてしまっているので不可能です…すいません」

じゃあ、どうしようもないじゃん。連れて行かれるのは天国？地獄？

「いえ、あなたが行くのは別の世界です。こちらの不手際で死んでしまったわけですからもう一回、人生を歩んでもらいます。」

えーだるい魂消滅とかじゃねぇの？

「嫌なんですか？」

だってこいうのって死亡フラグ満載な所に飛ばされるんじゃね？

「そうですね、そしてもう決まっているんですよ。」

なーんか死亡フラグな予感

「そうですかね？インフィニット・ストラトスですよ、あなたが飛ばされる世界は。」

ＩＳという女性しか動かない機械ができて、主人公がＩＳを動かしてしまったっていうアニメ化された奴？

「はい」

まぁ　ほとんど現代社会とおんなじだよね　死ぬ確率はそんな高くないかな？

「そうですね。今回こちらの不手際なんで能力や願いが５つ与えることができます。あ、今までの記憶は引き継いでいるので、あと、もうこちらで主人公と同じくＩＳ動かせることになっていますので、かなえられる願いは４つですね。」

え？なんで動かせるの？

「え？　先輩方は転生者が来たときに一番多い願いがこれがったので、早めにつけてしまいましたがいけませんでした？」

まぁ、憧れるけどさメンドクサイことが起きそうでね…まぁいいや、１つ目は開発チート　２つ目はＧＮドライブの入手、えーとアニメで使っていたオリジナルのやつ５つで。

「はい。３つ目は？」

３つ目は経験値急増蓄積かな？

「えーと、すいませんどういった能力ですか？」

ＲＰＧのゲームとかだと経験を積んで強くなるけど、俺の場合人の何倍の速度で経験を溜めることができて、何年たっても衰えないってとこかな。

「はい、アニメとかラノベとかで見なかったので、どういう能力かわかりませんでした。」

神様もラノベとか読むんだな…

「はい！もうユニコーンとか面白くて！！主人公がなんで説明なしにユニコーン動かせるんだよとか――ーー最後に出てきたあれとか続きが早くみたいです！」

やっぱ趣味の話とか饒舌になったりするよね、そして長い…

「すいません。で４つ目は？」

んー　向こうについてから考えるとかだめ？

「まぁ、いいです。連絡手段とか携帯に入れといてよろしいでしょうか？」

んー　携帯手に入れたときになぜかアドレスが入っているという形でお願いできます？

「はい、いいですよー」

ん、いろいろあんがと

「いえ、では次の人生ではご迷惑かけないようにします。では」

その言葉を聞いた瞬間黒い穴がでてきてその穴に吸い込ませた

そして

「がんばりましたね、元気な男の子ですよ。」

本当に転生したよ俺

プロローグ（後書き）

誤字、脱字、感想等あればよろしくお願いします

今幼稚園児です

俺が転生してから４年たった。え？その前はないのかって？無理だって赤ん坊のやれることって寝る食べる寝るぐらいしかないんだ。（食べるじゃなくて飲むか？）それに作者にそんなこと出来るわけないだろ？ただでさえ面倒なのに・・・・・・って作者って何だ？まいっか。

俺の名前は前世と同じく木村　暁（あきら）だ。今は保育園児である。

で神様からもらった能力だが積極的に使ってない、使う気もない。というのも１つ目の能力開発チートは、ＩＳができるのなら技術者でもなれば食っていけるだろうって思ったからだし、２つ目のＧＮドライブは、そりゃ開発チートもらってんだからガンダムつくってみたいが、４歳児がそんなの持っていたらおかしいので前に父親に買ってもらったＧＰＳ付き携帯に入っていたアドレスで神様と連絡を取り「必要になったら届けてくれる？」とお願いしてみた。で「はい。４つ目の願いには入りませんのでしんぱいしないでくださいね」といってきた、

「話とか聞いてもらってもいい？こっちで事情知っている人とかいないからさ」

「けっこうこっちは暇なことが多いのでいつでもいいですよ」といってきてくれた。

そしてまだ、４つ目の願いは考えていない。

３つ目の能力の経験急増蓄積は、最初からチート能力持っていて使ったところをみられたり、ばれたりすると厄介事になりそうだか

ら、周りにいる園児たちとほぼ身体能力は同じである。
まぁ、荒事が起きた時逃げられるように足は鍛えているが。

で、今木陰で寝転んでいる。だって実際年齢２０歳以上のやつが４～６歳児と一緒に遊ぶって、気が滅入る。というわけで今日もねｙ「あの・・・」・・・・・・なんだよ

ｓｉｄｅ　織斑　千冬

きょうは　とししたのひとたちとあそんでみよう　とせんせいがいって　みんなぐるーぷをつくりはじめた。わたしは　たばねちゃんとぐるーぷになったけど　ほかのみんなはこっちにこようとしない

せんせいがこっちにきて「ねぇ」とはなしかけてきた　けどたばねちゃんは「うるさい」っていったでもせんせいはつづけて「あの木の下にいること組んできてくれないかな？あの子も友達いないの、だから友達になってあげて？」ってせんせいがいった。

だからいつもひとりでいるのかな？　おともだちがすくないのならすくないものどうしおともだちになれるのかな？

わたしのせいでこわがれるかもしれないけど。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

あーなんか二人組がこっちに来て黒髪の女の子が俺を見下ろしている

「わたしはおりむら　ちふゆっていいます。」

・・・おりむら　ちふゆって織斑　千冬か？原作キャラじゃん・・・でも自己紹介されたら、返さんとあかんよな　俺は起き上がって

「あー木村　暁（あきら）記憶の片隅にでも置いといてくれ。」

「ほらたばねチャンもあいさつして。」

「えー　めんどくさいよー」

・・・うん確定　後ろのやつは篠ノ之　束だろうな

「それに　こんなやつとともだちになったたて　いいことないよ。おたくで　きもくて　いんしつで　ねくらそうだもん。」

毒舌設定ははこの頃でもあるらしい、きもい以外は同意してもいいが俺ってそんなにきもいだろうか？

「で何の用？」

とりあえずかかわると面倒なことになりそうだ

「おともだちになろう？」

「どうしたら友達になれるの？」

前世から思っていたことだがどこからが友達なのだろうか？そのことをクラスメイトに聞いてみたら一緒に遊びに行くのが友達・他人の家に上がって遊んだり泊まったりするのが友達、中にはしゃべったら友達というやつもいた。

俺は、誰かと遊びに行ったこともないし、誰かの家に行ったこともない、しゃべったのは学校での発表での意見や必要事項の連絡ぐらいだ。

まぁ　寂しい奴だと思えばいいけどさ、束が言ったこともあながち間違いじゃない。（アニメとか好きだしな）

「あそべばいいのかな？」

「何かしたい？」

「おまえみたいな　ねくらとあそぶなんてありえない。」と言って腕に抱えたノートＰＣを立ち上げる束

「わたしは…その…したいことがおもいつかない。」といって束のほうを見るて束が「だったらたばねのＰＣみればいいよ！そうしよ！！」といって強引に袖をひっぱり隣に座らせる。

「じゃ　俺は寝る。」とおｒ「おまえにはなにもいってない」あっそうですか

こうして帰る時間になるまで俺は寝て　織斑　千冬は篠ノ之　束のＰＣ画面を見続けていた。

夜

「もしもしー　神様今ひま？」

『はいはい暇ですよー。異常がなさ過ぎて新しい世界でも作ろうとしてました。』

「暇だからって新しい世界つくるって大事じゃないのか？」

『いえいえ、ドラえもんの映画にでてきた創世セットで作るので半日あれば十分です。』

「・・・ドラえもんが神の頂点なのか？」

『まぁ　死神だったり創神だったりいろいろいるんですよこっちには。』

「ブリーチとかな世界もあるのか？・・・ってそういうことじゃなくてさ」

『何なんですか早くしてください、こっちは急いでいるんですから』

「・・・さっき暇だから世界つくろうとしてたとか言わなかったか？」

『後輩がちょっとへましたようです。でそのサポートしなくちゃならなくなりました。』

「ああ、じゃあ　今日原作キャラにあったんだけどさげｎ『原作ブレイクしてかまいませんよ？』なんでさ？」

『あなたがいるのは原作とは違いＩＳの並列世界ですから、まぁ原作ブレイクしてしまっては何が起きるかわかりませんが。』

「ふーん」

『あと原作とは少し違ったことが起きるかもしれません。』

「たとえば？」

『そうですね。織斑千冬と織斑一夏の年齢差が違ったり、原作ではミサイルが飛来してくる数が２００ではなく多かったりするかもしれません。』

「そうなんだ。まぁ何が起きても巻き込まれなきゃいいだけだし、後輩助けてきてあげなよ神様」

『一様名前があるので言っときますがアテネです。神様では味気ないですし信仰心もないでしょ？』

「当たり前やがないか。命は助けと貰って感謝はしてるけどなんで信仰せにゃならん。というか手違いで殺されたし。」

『まぁ、信仰があたってもなくてもどうでもいいんですけどね、仕事ですし。』

「まぁ、仕事がんばってアテネ・・・って首都との名前じゃね？」

『被っているだけですよ。では』ピッツーツー・・・

「原作ブレイクねぇ・・・まぁ関係つくったところで大きくそれることはないだろうな。」

今幼稚園児です　（後書き）

こんにちは　紅刹那です

今は竜頭蛇尾の勢いで書いてます（それじゃあかんだろ

こんな駄文しかかねない作者ですがどうかよろしくお願いします（

それって一番最初に書かにゃならんのじゃね？

幼稚園の日々

幼稚園では前まで1人で木陰で寝ていることが多かったが、ここ最近は1人ではなく3人になっていた俺と織斑と篠ノ之である。

あれから3日くらいたつが何か進展があるわけではなく、俺は寝て、篠ノ之はPSのキーボードを叩き織斑はPS画面を見つめる。で他の園児たちは、遊具で遊んだり砂場で小山を作っていたり、でときどき織斑が行きたそうにそわそわしている。

「混じりたかったら混じってきたら？」

「だってみんなこわがるから・・・」

確かに織斑はツリ目だから睨まれているようにも見える。だったら・・・

「ちょっと来てくんね？」俺は立ち上がって園児達が多い砂場に向かう

「え？」

織斑は戸惑いながら俺についてきたそして

「はい、ちゅーもーっく！！」

といって園児がこちらをみると同時に織斑の後ろに回り（足鍛えておいてよかった）目のあたりの皮膚を上、横、下とひぱったり回したりしてみる。

目が怖いのなら目を面白くしてやればいいんじゃね？って考えたわけだ俺は。そして

「「「「「あはは」」」」」と園児達は笑い「おもしろいかおー」「もういっかいやって」とか言ってきた。

「ねぇ、いっしょにあそぼ？」と誰かがいい

「うん！」

ふー失敗したらどうしようかと思った・・・

で俺はもとの木陰へと帰る・・・え？織斑達と遊べって？これ以上フラグ立ててどうすんの？というか幼稚園児と遊んで俺が楽しめると思うのか？ＰＳＰでアーマードコアやっているほうがまだましじゃね？というかそっちのほうがおもしろい。

って篠ノ之どうしよう。まずい俺が織斑を自分から奪った形になってしまう。俺の計画では篠ノ之もついてきて２人には園児の輪に入ってもらうつもりだったのだが・・・これでは１人孤立してしまった。やヴぁい　えーと・・・

「織斑が砂場で遊んでいるけど行かないのか？」

「ゆうどうしていてなにいってるの？ばかなの？しぬの？」

「馬鹿ではあると思うけど死ぬ気はないです。そしてごめんなさい。」

「フン」

それから篠ノ之は今までと同じようにＰＣのキーボードをたたき続けた。ただ今までのキーボードは流れるように音を奏でていたが、この日は力押しでたたいているような音が聞こえた。

それから次の日、今日も俺・織斑・篠ノ之の３人が木陰にいた。途中織斑は園児から声をかけられ遊ばないかと誘われた。その時、織斑が

「２りもいっこ」

と織斑がいってきた

「ちーちゃんがいうならいく」

よっしゃぁあああああ。これで篠ノ之は孤立しなくて済む。そして俺は篠ノ之からターゲットから外される。将来ＩＳつくって世界征服しようとすればできるからなこいつ。

そして、俺は安心して日々を寝て過ごすことが・・・「きむらくんもきてよ」・・・え？

「Ｗｈｙ？」

「え？」

「声かけたのって篠ノ之とそっちの子だよね？」

「ちがうよ。たばねちゃんときむらくんだよ？」

これ以上フラグを立ててはいけない、そんな気がする。

「えーと、これからお昼寝しないと俺は一日の睡眠時間２０時間を達成できｎ「ちーちゃんのいうことはぜったいなの、ついてこなかったらつぶすよ？」はい遊びましょう・・・」

なんでだろう白い悪魔がいた気がする。

んで、かくれんぼをすることになった。

参加者は園児１３人（俺も含めて）で鬼は織斑とさっきの声を掛けてきた園児そして現在スタートから１８秒経過、あと１２秒のうちに隠れなくてはならない。

よし木の上か屋根の上に登ろう、そうすれば見つけずらいさらに木なら昼寝できるし、屋根の上なら日向ぼっこだ。ということで木陰で寝ていたので屋根の上に登る。

え？どう登るのかって？この幼稚園２階建てでハシゴが２階の壁

についてある。しかし危険防止のため園児には手が届かないが、俺は足を鍛えているため跳躍で手をハジゴに引っ掛けることが可能である。３つ目の能力で足だけは鍛えていた成果が今出た。そしてのぼって・・・

篠ノ之がいた。

「どうやって登ったの・・・」

「そっちこそどうやってのぼってきたの？」

「跳んで」

「あっそ、でもここはわたしのかくれば。どっかいけ」

しかたない　物陰にでも隠れるとしようかなと思ってハシゴを降りはじめ・・・「ちょっとまった」なんか声かけられた。

「なに？」

「・・・なんでおこらないの？」

「何に対して？」

「たいていバカっていわれたらおこるでしょ」

「本当のことじゃね？」

「じかくがあるの？」

「それもあるが、篠ノ之が俺をバカって思っているならそれが俺の存在ってことになるんだろ？」

「じゃあ、あんたはわたしをどうおもってるの？」

「うーん・・・織斑には心を開いているけどそれ以外の人はどうでもいいって感じな人」

「ちがうよ」

「そうなのか？」

「わたしがこころをひらいているのは、ちーちゃんのほかにほうきちゃんといっくんだよ」

あれ？もう一夏と箒って生まれてんのか？これがアテネの言っていた原作とは違ったことが起きるというのはこのことだろう。

「っそ」

「なにそのへんじ」

「いや俺関係ないじゃん」

「そうだけど、であんたはあたしにばかとおもわれたままでいいわけ？」

「べつにいいよ。そういう風に見られるのが嫌になったら、変えていけばいいだけだと思うし。大変そうでやりたくないけど。」

そう言い終わったとき下から「きむらくんみーっけ！」って言われた。

そういえばかくれんぼの最中だったな…

「あんたのせいでわたしまでみつかるじゃない！！」って篠ノ之が大声をだしてしまって「そこにたばねちゃんもいるんだ　でてきてー」って織斑の声が聞こえた

「あんたのせいでみつかったじゃない」

「見つかるのが嫌なら出てくるなよ」

「ちーちゃんがでてきてーってでていくしかないよ」

どんだけ百合なんだお前は

そして、せんせいに屋根は落ちることがあるからもう登るなとおしかりを受けた

帰り道に篠ノ之から蹴りをくらうはめになってしまったのは不運だと思う

幼稚園の日々（後書き）

んー　篠ノ之束どうしようかねぇ…

なんかツンデレ化してきた

幼稚園の日々　2

今日も木陰の中で寝ようとしていたのに織斑のやつ最近また俺を誘おうとしてきた。

あの日から、遊び仲間が増え笑っている姿をよく見かける。あーやだやだ。

え？何がいけないかって？

だって、子供達って相手にすると疲れてくれんだじぇ？例えば、最初のうち熟語やらことわざやら知っている言葉（子供達はまだ覚えていない）を言って言葉が通じなかったり、それなに？って言われていちいち説明するのがメンドクサイ。

篠ノ之の方は織斑とは遊びたがるが他の子たちとは遊びたがらない。で、子供たちの人間関係を崩すわけだ。

あそこから、関係を作るのは難しい、「嫌な奴」というレッテルを貼られていると思う。もともとかもしれないが。

どうしようか？

で今の時間はお絵かきであったりする。

俺は前世の記憶があるから、ガンダムやらアーマードコアの機体やら書いていたりするわけだが脳内に、数式やらなんかよくわからないイメージが出てきたりする。たぶんこれが開発チートの能力なのだろう。で紙の裏側にその数式やらイメージやら書いている。

「なにかいてるの？」といって紙を覗いてきた織斑が言う。俺は書くのに夢中で聞いていない、今のうちに書いておかないと忘れてしまうのでは？と思うしやっぱあこがれるかなぁ

「すごいもじがおおいね　ねぇたばねちゃんなんてかいてあるのかわかる？」

「・・・・・・・・・・」黙り込む篠ノ之

「たばねちゃん？」

「・・・・・・・・・・おい」

俺は書くのに夢中で聞こえない

「・・・・・・・・・・・・・・・・・おい！」

俺は書くのに夢中できこえない

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・おい！

！！！」

俺は書くのに夢中できこえｎ「パンッ」

「いてっ」

ハリセンで叩かれた。なんでやん

「なに？」

「これあんたがかいたの？」

「そうだけどなに？」

「もっとみせてもらっていい？」

「いいけど・・・」・・・・・あ　やべみせちゃったよ　さすがにこの歳では篠ノ之もわからないだろうと高をくくっていたが、こいつ原作じゃ天才なんだ。今書いた数式やイメージがこいつには分かってしまう可能性がある。というか真剣に見ているのは分かっているのだろう

一波乱ありそうな予感　大丈夫か俺？

幼稚園の日々　2（後書き）

今回少なかったかな？

小学校へｙ

前の話からいろいろと篠ノ之が話しかけるようになってきて、原作介入確率が高くなってきあがった。

メンドクセェー

さらに1学年違うから、幼稚園に残ろうとするは卒業式は潰そうとするは・・・・止めるのがきつい。それで、卒業してからも幼稚園で待ち受けて一緒に帰ろうとする・・・ハァ

それで小学校は別にしようと家より離れた学校選んだら、あの糞野郎（この場合糞女か？）が工作しあがって同じ学校になってしまった・・・

入学式何があったか聞くかい？聞きたい人は聞いてくれ（もしくは読んでくれ）

ｓｉｄｅアキラ

今俺は今年から入学する学校の体育館にいる。

そう、あの天才（天災）のいる学校だ。

まぁ、かかわらなければどうということは・・・というか登校拒否していいだろうか。前世じゃそれなりにまじめに学校に通っていたが。登校拒否しているニート達の気持がわからなくもない。鬱だわ入学初日から・・・

で、目の前に広がっている光景がすごい。花火がバンバン飛んで、ラッパが窓が揺れているほどの大音量で鳴り響き、さらに大抵「入学おめでとう」とか書いている看板が「入学おめでとぅーあっくん」とか赤いペンキで乾く前につるしてしまったのかところどころ垂れているのが書いてある。もう血で書いたんじゃね？ってぐらい赤かった。時間がたつにつれ黒ずんでいったけど・・・血じゃないよね？

で、そんなことをするやつは俺の知っている中で1人しかいない、というか思いつかん。

「あっくぅぅぅぅうんーーーーーーーーー！！！！」

なんか篠ノ之が世界記録変られる速度で突っ込んできた。それに対して俺は篠ノ之の腹をなぐってやる。

（。o。ΣC＝（＿＿；

「ぷぎゃぁぁぁぁあああああああああああああああああ」

顔文字からはわからんだろうがまぁ世界チャンプ候補のボクサーのパンチぐらいだと思ってくれ、なんか真似してたら身に付いた。

「ひどいよあっくん！ハグだよハぐ！おめでたいことがあったら親しい人とハグするのは常識だよ！！あっもしかしてあっくんはキスがおのぞm」「ブルルルァァァァアアアア！！」「ゴッフ」

「何がおめでたいの！？血みたいな字でおめでとうと書かれてもちっとも嬉しくねェよ！他の子怯えてるし、うるさいし、迷惑千万だろ？！そしてハグって欧米かよ！」

「なかなか古いネタを使ってくるねあっくん！！」

もう一度殴って篠ノ之を沈黙させ、入学式は、看板やら花火やらを撤去して開催された。

ちなみに篠ノ之は織斑からＯ　ＨＡ　ＮＡ　ＳＨＩ　☆されたらしい。

「束、どうして放課後まで待てなかった」

「だってー」

「放課後になったらお持ち帰りしようと言ったのは束だぞ？そしてお持ち帰ったら」

「ちーちゃんと束さんの魅力であっくんを　い　ち　こ　ろ☆」

それからまた篠ノ之は気絶したとか「やめてくださいすいません
でしたスイマセンデシタスイマセンデシタスイマセンデシターーー
ーー」とかうわごとをつぶやいていた。

小学校へｙ（後書き）

今週から研修です。

次は１２月いこうとなるだろうかと・・・

現在中学生

今俺は町はずれのゴミ捨て場でゴミを漁っている。別にホームレスになった訳ではない。

現在の俺は中学2年生なのだが、中学に入って機体をつくり始めたのだが、まだ完成していない。技術的な問題ではなく、資金的な問題である。

中学2年のこずかいなんてたかが知れている。配電コード、電子部品、装甲、いろいろ必要なのだが、専門店やネット販売で全部そろえられるわけがない。

というわけで、資金面の問題をこのゴミ捨て場でどうにかしようとしている。

まず機体に使えそうな部品を集めるのと、直せそうな機械を集める。

直せそうな機械は、直してリサイクルショップやバザーなんかで売って資金を集めている。売った金額は結構な額になっていると思う。

（まぁどうでもいい話だが、こんなところでゴミを漁っているせいか学校で、汚いだの・臭いだの言われ印象は良くない。そのため友人関係もほとんどいない。）

俺の記念すべき最初の機体は「ＣＲ」（コア）と名付けた。形状はアーマードコアネクサスの初期の機体で、ジェネレーターにはＧ

Ｎドライブを想定している。

え？Ｏガンダムじゃねぇのかよって？

Ｏガンダムは、ＧＮフェザー、ビーム兵器、Ｅカーボンなどの高技術をもっているんだ。そこが問題。

今の俺には金がない。で、Ｏガンダムを再現するのにかかる費用を計算してみた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うん無理（，・ω・、）悲しいねバジーナ

まぁ、今ある方法でつくっていくしかない。

で、機体状況だが完成度７０％ちょいというところである。つくり始めて１年と１０ヵ月ぐらいたった。

まだ、左腕部が完全ではないし武装は初期武装を想定しているがレイダー（ＣＲ－ＷＢ６９ＲＡ）以外はない。

心もとないがエアガンを改造し、小型化・連射強化・威力強化してガンダムでいうところのバルカンを作成。カテゴリーはインサイドとエクステンションにして取り付けてある。形状はハンドガンの取っ手をなくして、３本並べ後ろの方に弾薬（パチンコの玉）の箱があるような形だ。

威力はコンクリートに１ｃｍめり込むってところだ。

推進力にはＧＮ粒子のフォトン崩壊現象を使い、ブースターは排気口の奥の方に小型のＧＮコンデンサーとエネルギーケーブルをつないである。

装甲は、その辺に放置してある車から抜き取り、溶接機でつなげたりしている。それにＧＮ粒子を吸蔵させ防御力をあげ、軽量化にも成功している。

こんな感じだろうか。結局のところ性能なら第一世代のＩＳに負けている。現代兵器でも上回ってはいるのだが数で攻められれば、負ける。

こちらのアドバンテージは、ＧＮ粒子の通信妨害・レーダー妨害・質量減少・慣性力の減少ぐらいだろうか？

だが、慣性力の減少・レーダに映らないステレス性能はＩＳのもあるはずである。たぶんだが質量減少も幾分かあるだろう。

だとすると「ＣＲ」は白騎士事件の時に出さない方がいいのかもしれない。そもそも「ＣＲ」をつくったのは、アテネが言っていた原作とは違うということが白騎士事件で起きるかもしれないからである。

で、今のスペックだとやばい。ミサイルは何とかなるかもしれないが、ミサイルを撃墜した後に各国から戦闘機やら巡洋艦やらうじゃうじゃでてきたはずである。

それらと対峙することになると、いくら俺が普通ではないとはいえ生身の人間だ、銃弾で撃たれれば死ぬ。それに相手を生かしたまま倒せるほど余裕もないだろう。

遠くから様子を見て危なくなったら助けて、とっとと各国の戦闘機が来る前に、逃げる。

うん。これでいこうか。

『ブーブー』

「やべっ、道場の時間過ぎてる」

俺は携帯のアラームを消し、近くに止めてあった自転車で道場まで走る。といっても、もう遅刻だろうが・・・

小学6年の終りぐらいまで織斑に誘られ続けていたのだが、無論、めんどくさそうなので断り続けていたら業を煮やしたのか、織斑が

真剣持ってリアル鬼ごっこになった。

あれ？

Qなんで真剣持ってるの？

A道場からもらった

Qなんで振り回せるの？

A稽古しているからな

らしい

こいつもチート能力もった転生者か！？　とかおもった。

まぁ、経験値急増蓄積のおかげで、高校生とも互角に近い試合をすることができる。

織斑は国内優勝候補に全連勝してたが・・・・・・・。

うん。チートだ。

で、今道場につき自転車を止め道場に入るとそこには、

鬼がいた。

「誰が鬼だ。」

「なんで心読めるし。」

ほんとなんで？

「顔に書いてある。で、遅れたわけは？」

「ゴミ捨て場でゴミ回収して『シュッ』！！」

俺は危険を感じ、反射的に後ろに下がったそして手前を何かが横切ったので見てみると、真剣だった。

「まったく、なんで私の剣は避けられるのにお前は不抜けているのだ？」

「俺が不抜けているのは何時ものことだ、そしてなぜおれを殺そうとしたし！？」

「私は、時間が守れない奴と不抜けている奴は嫌いだ。」

「だからって殺そうとするか？」

「避けただろうが。それに峰打ちだから安心しろ。」

よく見ると織斑が持っている刀は逆向きだった。

「安心ねぇ・・・」

できないぞ俺は。

「それに木村さんたちからお前のことを頼むといわれているのだ。」

俺の両親は今ドイツで研究をしている。母さんがドイツ人で父さんが日本人。

なんでも研修で来た時に知り合い、付き合いだしたらしい。

母の眼が紅くで俺の眼も紅い。それ以外は日系人の黒髪に黄色い肌である。

俺はどこぞの心霊探偵の糞父親でもないし、運命で主人公になれないキレやすい奴でもない。

この眼を小学生の時に、怖がれたり、気持ち悪がったり、からかってきた奴がいたが、からかってきた奴らは、ちゃんとその言動や暴行を録音してぶん殴ってやる。
それども懲りない奴は、翌朝ゴミ箱に頭から突っ込んでいる、という奇怪な現象に襲われたらしい。

なんというかこんな転生してぐーたら生きているのに、それでも育ててくれた人たちを馬鹿にした奴に、なにもしないというのは出来ない。

正義感とか良心とかではなく、ただ単純にムカつく。だから殴る。

「それにお前を殴るという楽しみが増えるしな。」

っと今は会話中・・・って

「おまっそれ、虐待。」

「大丈夫だ。阿呆の躾と言ってある。さて、躾ついでに死合いもしとくか。」

「待て字がちg」

それから、躾という名の虐待が始まった。

「いてぇ・・・」

「大丈夫か？アキにぃ。」

「大丈夫に見えるなら眼科行け。」

今道場から出て座り込み織斑一夏とで　織斑千冬と篠ノ之箒を待っている。

そして俺は織斑（千冬）の方に躾という名の虐待を受け体の至る所に痣がある。

「でもすげぇよアキにぃ。千冬ねぇから一本取るなんて。」

「まぁ、な。」

「３０試合もして１本しか取れないとは情けないと思わんのか？」

いつの間にか鬼がうしｒ『ゴンッ』・・・ぐーで頭殴られた。

「また、顔に出てるぞ。」

「俺の体は崩壊寸前です。」

マジで

「フン、まぁいいだろう。」

やった許してくれた！！

そして、篠ノ之箒がきたので４人で帰ることにする。

ちびっこ二人は前で会話している。

いつもなら篠ノ之束もいるのだが。

「なぁ篠ノ之最近見ないけどどうした？」

「なんやらパワードスーツみたいなものをつくっているらしい。」

どうやらもうそろそろ白騎士事件が起きるらしい。

急ごしらえでもいいから完成させておくべきか。

「あとアキラ、いい加減　織斑・篠ノ之ではなく名前で呼べ。紛らわしいだろうが。」

「織斑それ・・・」

「私の名前は千冬だ。」

「織斑千冬・・・」

「なぜ名字まで呼ぶ。」

「・・・・千冬それはフラグだ。」

ほんとフラグにならないよな？

『でお金をどうしようか？と私に聞くのですか？』

「まぁ、愚痴程度に聞いてくれれば。」

今アテネと携帯で話している。これから第二世代、第三世代をつくっていくのだから金は今まで以上にかかる。

『そうですね。私ならお金なんて無造作につくり出せる能力や運を最高ＬＶまで上げることができるので４つ目の願いを使いますか？』

「いや、まだとっておく。でもいい考えが浮かんだ。」

『どんな考えです？』

「株をしようかなと。」

『できるのですか？』

「本とか読んでれば何とかなると思う。」

『そういうものですかね？』

「まぁ、どうにかする。」

『そうですか最後に１つだけ言わせてください。』

「？」

『私の出番ここだけですかぁぁぁあああああああああああああああああ！！！！！！！！』

現在中学生（後書き）

帰ってきました。

次回は白騎士事件でｓ・・・え？なぜＯガンダムじゃない？

いや、あれはグレーだとかっこいいんですが、なんか気分で出したくなかった！！俺は平成ガンダムはだからな！

（００じゃなくね？）

白騎士事件

俺が中学３年になって１ヶ月たったころ、束がＩＳを発表し政府がＩＳの性能を認めなかった。

政府に発表した数日後、残念会をしたり・俺がＩＳを見て強化プランを提示したり。（「見せて」といったらみせてくれた。・・・・・いいのかそれで。）ＩＳの強化は俺が白騎士事件に介入しないようにするためだ。

そして、１ヶ月半たったが、まだ白騎士事件は起きていない。

その間に株をやって金を集め機体改造費にし、できるだけ強化した。

で、今の機体状況だが

未完成だった左腕部は完成した。

ＧＮドライブもアテネから１個受け取り装備してある。（Ｏガンダムのオリジナル太陽炉）

武装関係はエアガンを改造しまくって、アーマードコアでの初期のライフル（ＣＲ－ＷＲ６９Ｒ）の再設計した（ＣＲ－ＷＲ７３Ｒ２）をつくった。

また、腰にマウントできるようにして装備している。

またそれぞれのエアガンを改造し

右腕部　スナイパーライフル（ＣＲ－ＷＲ７３ＲＳ）

左腕部　マシンガン（ＣＲ－ＷＬ７４Ｍ）＆レイザーブレイド（ＣＲ－ＷＬ６９ＬＢ）

バックユニットＬ　レーダー（ＣＲ－ＷＢ６９ＲＡ）

バックユニットＲ　小型化チェインガン（ＣＲ－ＷＢ７２ＣＧＬ）

インサイド　バルカン（ＣＲ－Ｉ１Ｂ）

エクステンション　バルカン（ＣＲ－Ｉ１Ｂ）勝手に命名

を取り付けてある。

初心者の俺が動く物体にあてられるか疑問だったため、ガンシューティングゲームで鍛えてはいるが大気の状態や反動制御がゲームにはないため不安だったので、打てば当たるの思考で連射、弾数が多いようにした装備をつくった。

弾丸は外国から輸入できるらしいのだが、日本に持ち込めるだろうか？　ということで弾はパチンコ玉・・・打ち落とせるのか？ミサイル

あと、試作段階のレイザーブレイド（ＣＲ－ＷＬ６９ＬＢ）は後ろの方に、ＧＮフラッグのようなコードが付いておりその先端に背

中の小型コンデンサーからＧＮ粒子を得ている。（配置場所はレーダーとの接続部分に長さ３ｃｍの円柱がコンデンサーでそこの端にレーダを取り付けた。）

だが原作ビームサーベルと比べるとダメな武器である。刃の部分が２０ｃｍもなく、またエネルギーの使用率も悪く威力も原作程ない。

確か同じ装甲を1度で切れたはずなのに、このレイザーブレイドは何回も切りつけなければ切れない。

また、Ｏガンダムのシールドも作り背中に斜めに取り付け、シールドの裏側にブースターを取り付けた。使用時には取り外すのはマシンガンのみでブレードは装着し続けることが可能だ。

これで機動力やら総火力やらが強化された。

また、一様トランザム可能機体である。ただし発動時間は短く最大継続で４５秒、粒子出力も3倍ではなく1，８倍である。

まぁ、ＩＳに足元くらいにはおよぶ、ってぐらいの性能なのだろうけど。

本当に、株やって儲なかったらヤバかった。未完成で出撃する可能性があるのだから。

『ＰＲＲＲＲＲ、ＰＲＲＲＲＲ』

携帯の着信音だ。

「はい。もしもし。」

『アテネです。今各国にハッキングされたミサイルが日本に向かってきてますよ？』

「え？」

テレビをつけてみる。そこには信じられないという顔のニュースキャスタが

『全国の皆さん落ち着いてください。いま日本にむかって２３４１発、いえ、さらに８７３発今発射されましたのミサイルが飛んできてます。』

とか言っていた。

確かに耳を澄ますと、悲鳴や怒鳴り声が聞こえてくる。

『で、どうするのですか？』

「とりあえず」

『とりあえず？』

「ファーストフェイズを開始する。」

『カッコよく決めたつもりでしょうが、ただ見ているってだけですよ？　ファーストフェイズって。』

いうなよ

家のカギを閉め、自転車を走らせゴミ捨て場に向かう。

ゴミ捨て場に到着し、自転車をその辺に止めすばやく「ＣＲ」を起動させミサイルの来る方向へ飛翔する。

「「ＣＲ」出る！」

恐怖がない訳ではない、ほんとなら関わらずにいたい。でもそれで取り返しのつかないことが起きたら？、もし俺の家に落ちたら？

もし町に落ちて人がたくさんしたら？誰だって死んだと聞かされていい気分にはなれない。結局のところ自分のためなのだけどさ。

俺は、力を持っているのに。

だから行くんだ。

もしのことが起きないように。

Ｐｌａｃｅ　海上　Ｓａｅｄ　千冬

「ちっ」

ミサイルを3発ほど同時に切り裂き、荷電粒子砲を呼び出し2、

3と遠いほうのミサイルを撃ち落とした後　また、ＩＳを加速させ縫うように進みミサイルをいくつも切り落とす。

「まったく、多いぞ束め。」

いくらＩＳが現代兵器より強いといっても無敵というわけではない。確かにシールドエネルギーや絶対防御があるため死にはしないが、飽和攻撃を受ければいくらＩＳでもきついだろう。

「くっ！」

そんなことを考えていたせいかミサイルがうじゃうじゃ向かってくる。

剣で切り裂き一瞬目の前が爆煙につつまれる。

この時ミサイルが3発　白騎士の横を通り過ぎ、日本へと向かいつつあった。

「！！っ。しま『ダンッダダンッ』・・・」一瞬何が起きたのかわからなかった。

通り越してしまったミサイルが自分の目の前で爆発した。なぜ？

その疑問は、爆煙が晴れてからわかった。

「灰色の・・・ＩＳ・・・？」

それは全身が灰色の箱のような無骨なデザインだった。

Ｓａｉｄ　ｏｕｔ

「あぶねぇあぶねぇ。」

ハラハラした心を落ち着かせるために言った軽口だ。

別に見過ごしてよかったはずだが、体が危ないと思ってしまったのか動いてしまった。

一発目をスナイパーライフルで撃ったのは、破壊できるか不安だったため、ではなく、俺が右利きだったため反射的に動いてしまった。その後の二はつめは落ち着きを戻しマシンガンが使えるかどうか調べるため弾膜をはり破壊した。

『大丈夫ですか？』

アテネが携帯電話ではなく、脳に直接響くようなそんな感じだ。

「意識共有空間じゃねぇぞ。」

『すいません。少しでもお力になれればと着た次第です。』

「じゃ、ミサイルが来る方向を示してくれ。目線をレーダーと全面に見直すのきついんだ。見落とすかもしれない。」

『わかりました。』

フーっと深呼吸をした後

「「CR」目標を駆逐する！」

それから、アテネのサポートを受け白騎士と一緒にミサイルを叩く。

ミサイルを何とかすべて破壊した。　ライフル以外の射撃武器は残弾数が半分を下回っている。

目の前には白騎士。

微動だにしない。

まさかな・・・。

白騎士事件（後書き）

白騎士事件はまだ続きます

白と灰

Ｓａｉｄ　千冬

『ちーちゃん、そいつやっつけて！』

ミサイルをすべて落とし終えた後に通信で束がそんなことを言った。

「協力した奴をか？」

『ＩＳはＩＳでしか倒せないって世界に見せつけないと意味がないんだよぅ。』

確かに今回の騒動はＩＳの性能を世界に見せつけることが目的だ。

『ちーちゃんだけを印象ずけるはずだったのに・・・こんなんじゃ半減しちゃうよ。』

「・・・・・・・・・・」

『それにあの機体の光通信を妨害するみたい。』

「こちらのレーダーも映りが悪い。種は速いうちに摘んだ方がいいということか・・・」

『ちーちゃんお願いできる？』

「・・・・・わかった。」

協力したことは感謝する、・・・・だが束ためだ。

「目標を破壊する。」

そう、破壊するだけ殺しはしない。

Ｓａｉｄ　ｏｕｔ

どのくらい動かずにいただろう。そんなこと考えていた。

『気おつけてくださいアキラ。』

「ん？」

『彼女たちはＩＳの性能を示すため攻撃してきます。』

「脳量子波でも使ってんのか？」

『似たようなものです。あなたの心を読んでいたでしょう？』

「千冬も読んでくるがな。」

『あなたが顔に出やすいだけです。』

そんな雑談していたら白騎士が剣を振り上げ突撃してきた。

速い

ミサイルを打ち落としている時にも見てもいたが、その一言に尽きる。

俺は後方へ下がり、左肩を前に出し右肩を引く様に回避行動をとるがあちらが速すぎて間に合わず、スナイパーライフルが切断される。

武器にかかった金を気にする余裕なんてない。

すぐさま左のマシンガンをぶっ放す。

で白騎士は避けた。２０弾全弾。

まて、いくらＩＳの方が能力が上だからって１ｍの距離から１発も当たらないのはおかしいだろ…。

とりあえず近づけさせない様にマシンガンの引き金を絞り、腰に装着してあるライフルを抜き両腕撃ちを始める。ついでにバルカンも撃ち続ける。

白騎士は近づいてきているのに、俺の弾膜はまったくっていいほどかすりもしない。

これはもうＩＳの性能よりも千冬自身の方を恐れるべきだった。

そして、荷電流砲を打ってきて俺は避けるだが、それが相手の狙いだった頃にはもう遅い。

体勢を崩されたところに懐に入り込まれ切り裂かれそうだった。なんとか左腕のブレイドを展開させ鍔迫り合う。

「ビーム兵器だと！？」

バイザーで顔の上は見えないが驚いている様だ。

（それはそうだろう。ビーム兵器なんて軍でもどんな研究機関でも未だできていない。実用化にいたっているのは束のＩＳぐらいだ、だがしかしこのブレイドもまだ改良しなければだけどね。）

そして、蹴られて距離を離され再度の突撃。なんとか避けようとしたが間に合わずマシンガンが切断される、俺は背の盾を左腕部に装着させ未だ振られる剣を防ぐ、だが後方に飛ばされ、剣はそれにとどまらす１振りまた１振りと切り続けられ、盾が耐久値を超えそ

うになる。

（くそっ）

このままじゃ倒されるだけだ。

俺は降下して海の方へ急ぐ。

白騎士も追ってくる。

そして肩のチェインガンを外しライフルを撃ち爆散させる。それが煙幕となり身を隠す。ここでコンデンサーにある高濃度ＧＮ粒子を解放させる。これで相手のレイダー機能を麻痺させることができず逃げ切れなかったら本当に死ぬ。

そして俺は海に潜り、逃げた。

Ｓａｉｄ　千冬

『ちーちゃん！』

「すまん。逃げられた。」

あの碧色の光の噴出のせいでレイダーがダメになった。

『ちーちゃん戦闘機が向かって来るよ。そっちを迎撃して。』

「・・・・あの機体はいいのか？」

『もう無理、追跡不可能だよ。』

「わかった。」

撃ってきた戦闘機を人を殺さないようにぶった切った。

（あの機体に比べれば）

まだ撃ってくる戦闘機を次々と切り

（数だけの貴様らなど）

（どうということはない！！！）

そこからは原作道理に戦闘機・巡洋艦・空母を人を殺さないように無力化し、忽然と消えた。

白と灰（後書き）

白騎士事件　終了

ＧＮ粒子をすべて解放→高濃度ＧＮ粒子を解放　に変えさせてもらいました。

全部解放したら　水中の中でのトランザムが使えないので。

臆病者と愚か者

とりあえず恒例になりつつある、機体状況から。

前との戦闘で、ライフル、レーダー、バルカン、ブレイド以外はすべて破損した。

シールドは何度も切りつけられ耐久値がヤバい。せいぜい後一回喰らっていたら壊れただろう。

機体そのものは無傷だったが、逃げるために水中でトランザムを使い無理矢理水中を突き進んでしまった。そのため機体のあちらこちらが悲鳴をあげている。

よく生きてたな俺。

とりあえず金もたまりだしたことだし、ガンダムシリーズでも作ろうかと思っている。

そういうわけで『ＣＲ』の修理、機体強化はしていない。

「え？ドイツに来い？」

今両親と電話中だ。なんでも今回の騒ぎ（白騎士事件）で心配し電話をかけてきたのだが、今後も事件が起きる可能性がないとも言えないからこっちで暮せ、という事らしい。

まぁ、ないとは言えない。

今回、俺が介入したせいでＩＳの評価が変わるかもしれない。といっても結果的に「ＣＲ」を倒しているし、その後の戦闘機２０７機・巡洋艦７隻・空母５隻・監視衛星８基を撃墜・無力化・・・・って監視衛星って宇宙になかったけ？大気圏外にも攻撃可能だと・・・？すげぇな、おい。

まぁ原作道理の評価である可能性が高いが。

「というわけで来週あたりからドイツに行くわ。」

両親からの電話を聞き、ドイツに行くことを道場の帰りに織斑・篠ノ之兄弟に報告。

なーんか千冬以外泣きそうにしているんだがどうした？

「あっくん。私を捨てていちゃうの？」

「・・・めっちゃ誤解を生みそうなセリフだな。」

「だってだって！やっとＩＳの性能が評価されたのに！」

「いや、俺開発にかかわってないし。」

「えー。束さんと一緒に開発三昧生活送ろうよぉ。」

結構魅惑的な誘いです。

「なに誘いに乗ろうとしている貴様は。」

なぜわかったし。

「以前言ったが顔に書いてある。」

そんなに顔に出やすいだろうか・・・？

「アキにぃ、もう合わないの？」

「いや、長期休暇には帰ってくるし今の世代、国際電話もできるしな格安で。一ヶ月に1回ぐらいだと思うけど。」

「じゃぁ、お土産頼むよ。」

「おう。・・・忘れてなかったらな。」

「そのくらい忘れるなバカ者。」

「じゃ、お別れ会でもしませんか？あ、この場合送別会でしょうか？」

「よく知ってるねぇ箒ちゃん！。それじゃぁそれに合わせてプレゼントをあっくんにあげようよ。」

というわけで、来週旅立ち会をすることになった。

道場から帰った後、みんなに荷物の整理を手伝ってもらっている。「別にいい。それに散らかってるぞ。」と言ったが、なんやら忙しいだろうとか時間もないだろうとか理由をつけられて押し切られた。

で、一夏の作業速度が速い速い。俺だと2時間はかかりそうなダンボール詰めや掃除など４０分ぐらいで終わらせていく、で姉の千冬だがこっちは対照的だ。普通服を詰めるのに折りたたんで詰めるだろ？こいつ投げてダンボールの中に入れたら、１０ｃｍぐらいはみ出している服の山を力押しで入れあがった。

たたむ努力ぐらいしようじぇ・・・。

箒ちゃんは一夏に習いながら荷物をかたずけて行く。ほんと仲がいいな。一夏がうらやましいよ。

束の方だがこっちはもうマンガ読んでいたり俺のエロ本を漁って居たりしていた。そのエロ本は千冬の手により、手で千切られ・刀で切り刻まれ・ゴミ袋の中に入れられ、火曜日千冬がゴミ捨て場に出した。

「なぜこんなものがある！？」

「見損なったぞ！！アキラ！！！」

「いいか貴様はまだ１５だろう！これは買ってはいけないものなんだぞ！！聞いているのか！？」

とかを顔を赤くしながら言い、４時間以上の説教（というか怒鳴り声）を聞く羽目になった。

その間俺は泣いていた。別に買っていいじゃねぇか！！俺だってそういう年だなんだよ！！って俺転生してるから実際年齢３０超えてるな・・・。うん。スケベ親父になってしまうのだろうか？

まだ、まだ待ちあうよね俺！？

自分で言っておきながらなにが間に合わないのか疑問に思った。こっちの世界じゃ１５歳なんだから。

で、学校に説明して退学したり家の手続きをどうするか両親と相談したり（家は残すことになった。何らかのトラブルでＩＳを動かしてしまった時、必要になるだろうと思ってだ。）一通り準備を済ませた。

で、問題がまだ残っている。

「ＣＲ」の事だ。

現在ゴミ捨て場に置いてあるが誰かが持っていたり、ゴミと間違え処分されたら大変だ。だからってダンボールに詰め輸送できるだろうか？

分解すればいいだけの話かもしれないがそうしてる時間がない。

どうしようかと悩んで、不安ではあるが・・・・・・束に預けることにした。

一応ブラックボックス化してあるのだが自力で解いてしまいそうで、擬似ＧＮドライブとかつくって何らかの厄介事（特に俺への）を起す気がしてならない。

かといって千冬に渡すわけにもいかない、これをつくった理由を聞いてくると思う。興味心でやったって嘘ついても、すぐ嘘だとばれてしまう。

俺が転生者で、神様から力をもらい、これから起こることを知っていて、それの対策として作りだした。っていう本当のことを言っても頭がおかしくなったって思い病院に連れて行かれるのが落ちだろう。

あいつなんだかんだで面倒見はいいんだ。学級委員長を何年もやっているのは伊達ではないということか。

それに束なら「あっくんすごいね！」ぐらいで終わると思う。

それに俺の心の中で嫌われてしまうのではないか？という気持ちが渦巻いている。

前世では、束や千冬の様な「友達」と心から言える奴はいなかった。

結局のところ、俺は臆病なのだ。

だから、今のこの関係を崩したくない。

たったそれだけの事だ。

で、束をゴミ捨て場に連れてきた。

「あっくん。まさかこいうところでそういう趣味が。そういえばあっくんのエロ本にそういうジャンルのが…。」

「違う。少なくとも現実でそういう事をしようとは考えない。」

「ちぇー。じゃあなに？」

「こいつを預かってくれてもらいたいんだけどいい？」

被せてあった布を取り、灰色の箱を繋げた様なロボットが姿を現す。

「これあっくんが作ったの？」

「まぁ。」

「もしかしてこれに乗ってミサイルとか壊していたりした？」

「まぁした。」

「もしかして・・・・・・・・・ミサイルハッキングしたのが誰かで白騎士って呼ばれているＩＳに乗っていた人が誰だか知っている？」

「束と千冬。」

「・・・」

「・・・」

二人が沈黙してどのくらいたっただろう。１分にも３０分にも１時間にも思えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ごめんね。」

「・・・・・・」

「私ねＩＳの性能を世界に見せるためにちーちゃんにもあっくんにも迷惑かけちゃった。」

「いつものことじゃね？それ。」

「でも！・・・でもあっくんを攻撃するように言ったのは私だよ。私は愚か者だよ。」

「あー、もうどうでもいい。それに俺だって臆病者だ。俺のホントのこと言ったら今が壊れるんじゃないかって怯えてるんだから。」

俺は、転生したこと・アテネという神に会ったこと・アテネから力をもらったこと・これからどのような事が起きるか知っていることを話した。

「そうなんだ。」

「受け入れられるのか？俺が聞かされたら頭がおかしいって思うぞ？」

「まぁ、あっくん昔から他の人とは違ってたしありうるかなぁ～って。」

「そう。」

「でこの子なんて言うの？」

「「CR」ってかいてコア。」

それから、それぞれの機体の自慢やどれだけ心血を注いだとか話していた。

臆病者と愚か者（後書き）

とりあえずまだ日本を出ません。

お別れ会・送別会・旅立ち会・・・どれが正しいのでしょう？

個人的に旅立ち会はない・・・とおもうのですが・・・うーん

ＲＹＵ様がら指摘を受け

一様→一応に変更しました。

ドイツへ

束に「ＣＲ」とＧＮドライブを預け、束に以下の事を約束してもらった。

１つ目、ＧＮドライブを壊さないこと。

２つ目、ＧＮドライブは俺の返して欲しい時に返してもらうこと。

３つ目、ＧＮドライブは作ってもいいが悪用はしないこと。

４つ目、ＧＮドライブ（複製Ｖｅｒ）はだれにも渡さないこと、するとしても俺に一声入れ許可しなければ渡さないこと。

５つ目、俺の本当のことはだれにも話さない。

１．２．３はまず預けているだけなのであげただけではない。

４は下手に亡国機業（ファントム・タスク）にでも回ったら面倒だ。

５は目をつけられるのが嫌なだけだ。

で、束は承諾してくれた。ホントいい友達である。

「あっくんのドイツへの出発を熟してかんぱ～い！」

「熟してどうする。」

ともあれ送別会が始めった。といっても参加者は俺と織斑・篠ノ之兄弟だけである。人数が多くても暑苦しいだけだがな。

「プレゼントたぁ～いむ。」

「「「わー（棒読み）」」」

「むぅ、みんなの反応がひどい。」

「お前が渡すものなんて爆弾・発信器以外に何がある？」

「そんなレッテル貼られてるの！？」

「「うん」」一夏・箒

「だったら見るがいい箒さんの本気を！」

といって束が渡すのは

ＩＳのコアでした。

「おい。」

「ん～。なにかなぁ。」

「ダメだろこれは。」

「えー。束さんの愛を受けとってくれないの～。」

「束の愛は俺に面倒事しか運んでこないんだな。ってか故意なんなら殺していいですか？」

「どうぞ。」箒

「殺ってしまえ。」千冬

「みんなひどい！」

「「「なにを当たり前な。」」」俺・千冬・箒

束は部屋の片隅で体育座りをしている。さすがにいじめすぎたか。

「まっありがとさん。」

「えへへ。なんだかんだであっくんは嬉しいんだね。」
マジやっていいですか？うざい。
「じゃ、アキにぃ俺と箒からはこれ。」
といって一夏がくれたのは、

千冬に捨てられたエロ本でした。

「ありがｔ『メヂィ』」
人の体では絶対に出ない音が出た。そして俺の体はビクッビクッ痙攣している。
「どうしてそれをプレゼントにしようと思った一夏？」
「なんかアキにぃがものすごく泣いていたから大切なものなのかな？って。」
「なぜ持っている一夏。」
「え？友達にくれって言ったらくれた。」

「その友達はどこのどいつだ？」

「同じクラスの川田。」

「そうか。箒はどうして渡そうと思った？」

「一夏が任せろっていうから・・・」

箒は顔を赤くしながら言った。

「まぁいい。」

といって、刀とエロ本を持ってどこかへ行ってしまった。

殺しはしないよな？さすがに。

出発日

織斑・篠ノ之兄弟が見送りに来てくれた。

なんでも千冬がプレゼントを渡しそびれたらしく（ちなみに川田ってやつはいい加減だった性格が人が変ったように真人間になったという。）それを渡しに来たらしい。

で、いつまでたっても渡す気配がない。

「また来てくれよ。アキにぃ。」一夏

「アキさんまたです。」箒

「またねぇ。あっくん。」束

「・・・・・・」千冬

と別れの言葉を言わない千冬さん。

なんやら束がちびっこ二人を連れて先に帰っているが・・・。

「おいアキラ。」

「なに？」

と顔を千冬に向けたとき

『ちゅっ』

と音が

え？

目の前には千冬の顔、距離はゼロ距離。

え？

俺の思考が回復する間もなく

『バチッ！』

ビンタをくらった。

「次に会うときはお前の心をもらう！」と言い残し走り去る。

いつぞやの束より速いと思う。

それから飛行機に乗りドイツに向かったが、乗っている間そのことが頭から離れなかった。

生身　VS　IS

現在、俺ドイツでＩＳつくってる。

父が「職場体験してみないか？」といわれ俺は「働く気なんてさらさらない！」と意気揚々にいったら

・・・・・・・・・・・・母が後ろからスタンガンで気絶され強制連行。

内の母上も暴力的だな。悲しいよ。

で、研究所に連れてこられＩＳの開発を手伝わされたわけだ。

ちょっと待て。

「ＩＳって国家機密だよな？いいのかよ。」って両親に聞いたら

「え？しゃべらなきゃいいんじゃね？」って適当だなおい。

で、ドイツの第一世代を今作っているわけだ。

黒色の装甲に、爪が長い凶悪な腕、太くスラスターを内蔵した長い脚。

原作であった第三世代の大型レールカノンはなく背後の翼（ＰＩＣ発生機？だったかな）もない

とりあえず　飛べるようにしようという事で開発を進めている段階だった。

で、俺がへまをしてしまった。つい「ここをこうすればいいんじゃね？」って頭に思った設計を言ってしまい、それが評価され現在ＩＳ第？研究所に務めることになってしまった。

ちなみに第？研究所はＩＳ本体の開発

第？研究所はＩＳの能力開発（ちなみに両親が働いているのはここ）

第？研究所は武装開発

現在俺は昼寝や無断欠勤をしながら働いている。それはだめだろうと思う人がいるかもしれないが、心配ないみんなそうしてるんだ。

ここの研究員は主任以外ほとんど顔を見ない。というのも大体の武装は決まっているためやることがないのだ。で、みんなはＩＳが作られる前の研究をしているというわけだ。

俺の現在やっていることと言えば「ＧＮ－ＸＸＸラジエル」と「ＧＮＲ－０００セイファー」を仕上げている。また、「アストレア」「サダルスード」「アブルホール」「プルトーネ」はすでにＦに改良してある。原作より改造されているが。

頭をヘルメットにすると息苦しいし締め付けられている気がするので、顔を見せないバイザーは取り外し可能・頭の上のコード類・装甲は撤去。

そのためアストレアを例にすると横の装甲とブーメラン形の角、角の碧の額のが付いているだけだ。

他の機体もそのようにしてある。

また、「アブルホール」は機首の下の方にビームライフルを内蔵してある。そして、腕の方は胴体と翼の間のスラスターの所に腕を収納している。

束に貰ったコアを機体に入れることを考えたが、４体もの機体と並列稼働ができないため機体を量子化して倉庫代わりにしてある。（コアも作っているが時間がかかっている。）

そして、サポートがあるとうれしいので独立支援ＡＩ『エイダ』・作業用メカ『ハロ』を作成。

『ハロ』には原作で出てきたように整備用カレルに乗り整備を『エイダ』には株の管理や世界の情勢を調べてもらっている。

『ほとんど完成してきましたね。』

「まぁ、時間と資金があればできるさ。」

『進行スピードと資金量が異常ですがね。』

「ほんとお前が株の管理やらしてくれて助かった。」

だって口座見たら桁が１０近くあったんだぜ？経済独占してないか？

『大丈夫だ、問題ない。』

「そのネタよく使うな。」

『織斑千冬のおかげで日本の株が急上昇したのでのってみたらすごいことになりました。』

「その辺は感謝感謝。」

『で、今日はどうしますか？　シミュレーター・昼寝・アニメ鑑賞・ないとは思いますが研究所へ行きますか？』

「研究所にいく。」

『・・・・・・・・・・・・・』

そんなに驚きですか。

自転車で第？研究所まできて主任のところまで行く。

「おっひさ～。」

「あっ、アキラくん今日は来てくれたんだ。」

この人が俺の主任フェイラ・フォーリンさんです。

さらさらとした絹の様な金色の長髪にルビーの様な赤い瞳、すらりとした手足、胸も結構・・・ゲフンゲフン。

美人さんでやさしい、生まれてきてよかったってさえ思える。ほんとどっかの誰かとは大違い。

「前に貰った武装の設計データーだけど、ハイレイザーライフル「ＷＨ０４ＨＬ－ＫＲＳＷ」だっけ？　重くて取り回しがつらいんだって、改良してくれって要望が来たのまた改良してね。今から演習所でダブルマシンガンの実験するらしいんだけど見に行く？」

「行く。」

『せいぜい暇だからでしょうに。』

「あはは。エイダちゃんもデータ取りお願いできますか？」

『了解。』

ちなみにさっきの武装の形状はアーマードコアで出てきたカラサワと

コブキヤのダブルマシンガンだ。

で、演習所についてフェイラさんは書類を抱えてどこかへ行ってしまい。俺の目の前にＩＳが銃を構えている・・・。俺もＩＳ用の武装、カラサワを右腕にダブルマシンガン（連結状態）を左腕に構えている。

演習場にフェイラさんを置いて入って行ったとき、隊員たちが俺を見るなり「帰れ！」やら「あんたの作る武器は使いずらい！」やら「とっとと死ね童貞野郎！」やら「――――――――――――！！（自主規制）」ものすげぇブーイング。

・・・・・・俺何かしたっけ？

『あなたが根暗な性格しているのとチビなのと貧弱なのが最大の原因でしょう。そして私も死ねばいいと思います。』

味方からの攻撃！　俺の心に１７のダメージ！！　え？　結構小さい？　だって気にしてねぇモン。

「これが木村夫妻のご子息かと思うと絶望します。木村夫妻もこのような人になったのでしょうか？」

隊員の言った一言が俺の頭を黒いマグマのように沸騰させる。

「おい。今家族馬鹿にした奴出てこい。殺してやるよ。」どすのきいた声と殺気を１００％追加して言った。

「別に俺を侮辱しようが殴りつけようがどうでもいいが、俺の家族をバカにするな。」

「・・・・・・・・いいでしょう。私に勝てたら先ほどの言葉撤回します。」

という事で決闘をすることになりましたー。

うん。生身にＩＳは卑怯だと思うんだ。フェイラさんはおどおどと、あっちゃこっちゃ動きまわってるし、周りの隊員たちは先ほどと同じようにブーイング飛ばしている。

自分の短絡さを嫌だと思う反面これでいいとも思う。

俺にだって大切な人がいるんだから。

「では始めましょうか。」

といってＩＳが突っ込んでくる。

俺はダブルマシンガンを発砲するがシールドエネルギーと装甲によって弾かれ相手はプラズマ手刀を呼び出し切りかかってくる。（通常の出力でやったら痛いでは済まないので落としている。）

俺は身をよじって躱しつづく攻撃も躱しつつ至近距離からカラサワをぶっ放す。

「くっ。」

相手はエネルギー弾の被弾によって後ろに飛ばされ、その隙に両手撃ちで相手のシールドエネルギーを削るだけ削る。

「こざかしい！」

俺を左側を回り込むように動きそれに合わせ俺はダブルマシンガンを撃ちつずけている。

そして、弾切れを狙ってか切りかかってくる。

プラズマ手刀を目先すれすれで躱しダブルマシンガンで

殴った。

どっちにしろ弾は連結した後ろの方に半分残ってるし前の方はもう撃ち尽くした。

前の方のマシンガンが壊れようがどうでもいいという思考で、相手の手刀を躱しつつ殴る。

「このっ！」

といって切りかかってくるが千冬の刀に比べればどうという事はない。また躱して殴る。そしてついに耐久が限界にきて前のマシンガンが壊れるが、そんなのお構いなしにマシンガンを乱射。

さすがにシールドエネルギーがヤバいのか後ろに引き、レールカノンを呼び出す。

（・・・おい。さすがにそれはないだろ。）

右腕のカラサワで破壊しようとするがこの距離では避けられてしまう。

そして、レールカノンの発砲で俺の前方の地面がえぐられ衝撃で吹き飛んでしまい立ち上がろうとするがカラサワを踏みつけられ俺にも手が伸びてきた。

カラサワから手を離し相手の顔を一発殴る。

そこで俺が押さえつけられ試合終了。

（殺すまではいかなかったが殴れたんだからいっか。）

その試合の後で、フェイラさんからＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩが来てしまった。うん、千冬に匹敵していたと思う。

「今後こういう事がないように！！　いい！？」

「・・・はい。」

フェイラさんから解放され、研究所の出口の所にさっきの試合でＩＳに乗っていた人がいた。

「先ほどの事を詫びに来ました。」

「？」

「私は木村夫妻に絶望の中を救われて尊敬していました。そのご子息が不抜けていると言われ憤っておりました。あの人たちのご子息ならもっと立派に強いだろうと思いました。しかし不抜けているあなたを見てあの人たちを侮辱してしまいました。」

「・・・・・・・・」

「本当に申し訳ありません。」

「別にいいですが今度からはやめてください。」

「はい。」

早々に会話を切り上げ、それから俺は家に帰るため自転車のところに行った。

（そういえば名前なんだっけ？）

試合で戦った相手がクラリッサ・ハルフォーフだったのは後日知ることになる。

生身　ＶＳ　ＩＳ（後書き）

うん。生身でＩＳと戦うとか、やってしまった。

だが後悔はしていない！！

ちまみにフェイラさんは

リリカルなのはのフェイトさんのイメージで。

アブルホールの腕の指摘を受けたので追加しました。

テロ事件発生　（前書き）

今回、ガンダム００の　８話　無差別報復をベースにしています。

テロ事件発生

最近、女尊男卑の風潮が強まってきた。

それに対して男尊女卑の考え方の奴らがまだいるらしい。

まぁ、俺にはどうでもいいことだが。

で、俺は今軍の訓練施設でクラリッサ・ハーフの監視下の元、射撃訓練をしている。

なぜ、訓練なんてしているかというとクラリッサと両親がＩＳとあそこまで戦えるのなら訓練してもっと強くなれとか言ったのだ。

無論反論したが無駄でした。

母上による背後からのスタンガン攻撃で黙らせられ連行ってな感じ。もうやだこの母上。

射撃訓練以外にも接近戦闘訓練、３０ｋｍものフルマラソン・筋力トレーニングなどの基礎体力の向上など、もう１卒の兵士並みにやった。

「もう、ＩＳなしでＩＳ倒せそうなんだが。」

「あのときは油断していたのと手加減していたからあれだけの戦闘をできたのです。」

「まぁ、空飛んで連続攻撃されてれば死んでたな俺。」

『そのまま死ねばよかったのに。』

「エイダ、一応作成者俺なんだが？　気遣いはくれんのか？」

『ならばせめて不抜けにならずに、寝坊しないようにしてください。』

「・・・はい。」

「もうそろそろ切り上げますか。」

というわけで今日の訓練終了。

「おーい。お弁当持ってきたよーアキラくん。」

キタ━━━━、（ °∀ °）ノ━（　°∀）ノ━（　　°）ノ━、（　）ノ━、（　°　）━、（∀ °　）ノ━、（ °∀ °）ノ　━━━━!!

マイエンジェル　フェイラさん！！

「アキラくん、変に笑っていて顔が怖いよ？」

「いえ、フェイラさんの作った弁当が楽しみで楽しみで。」

「あ…うん…。（お弁当でそんなにはしゃぐなんて、まだまだ子供なんだね。）」

フェイラさん、微笑ましい目線でくすくす笑ってるけど、どうしたの？

『一生かなわない恋ですね。』

エイダがなんか言った気がしたけど気にない。このポテトパンケーキうまぁー。

弁当食べた後は、フェイラさんと一緒に研究室に行き書類の整理をしていた。

といっても少なかったため速くかたずけてフェイラさんと買い出しに出ることにした。

これって、デート？

という淡い期待は早々に砕かれた。

フェイラさんの買う量が半端じゃなく、出かける前に行った「すごく買うけど荷物持ちお願いできる？」って言ったけどこんなに買うとは思わなかった。

両腕は腕に荷物を１０袋ぐらい通してもう持てない。さらに袋にはこれでもかというほどにパンパンに物を詰められている。さらにいうならもう３時間以上歩き続けているのだ。

「アキラくん、大丈夫？」

「もうそろそろやばいかも。」

ほんと強がれない。・・・あれ？　ものすごく鍛えてるはずなんだけどな？

「じゃ、ちょっと休憩しようか。」

といって近くのベンチに座ろうとしたその時、何かが光った。

光ったのは俺の５０ｍくらい離れたバスだ。

爆発だと分かったが、爆風に煽られながらフェイラさんの前に立ち必死にかばいながら倒れる。

水色だったバスは赤々と炎をあげている。その周辺には大小の瓦礫と共に数人が倒れていた。

「・・・アッ、アキラくん・・・だっだいじょうぶ・・・？」

「・・・だ、大丈夫・・・」

先ほどとは違う言葉を言っていた俺も、同じことを言ったフェイラさんも声が震えていた。

この時、各国の都市で7ヶ所同時にテロが起こった。

翌日の朝、１０時に千冬に電話をかけていた。あっちでは１８時ぐらいだっけ。

「そっちは大丈夫か？」

『ああ。東京でテロがあったが一夏も私も無事だ。』

「箒ちゃんは保護プログラムで大丈夫か？」

『日本の警備体制もそこまで緩くないと思いたいな。』

「そう。でも今後もあるかもしれんから気をつけてな。」

『アキラが気遣うなんてまたテロが起こるかもしれないな。』

「・・・冗談じゃねぇなおい。」

ほんと冗談じゃねぇよ。バスがもう少し近ければ巻き込まれていたんだから。

『悪い、ではまたな。（こういうとき以外にも電話をかけてくればいいのだが…）』

「ああ、じゃ、また。」

最後の方小声で何か聞こえた気がするが無視。

「エイダ。何かわかったか？」

『確定情報が二つ。まず今回のテロの首謀者は自然回顧主義組織「ラ・イデンダ」と判明。また拠点が幾らか判明。』

「すげぇなおい。資金の流れや世界情勢が分かっているからって・・・」

『で、どうするのですか？』

「クラリッサさんに報告しておくだけにしとこう。プロが対応した方がいいし下手に刺激してテロを激化にする必要もないだろ。」

『せっかくつくった機体が無駄になりますね。』

「まぁ、テスト機みたいなものだからなＩＳの第２世代もガンダ

ムの第2世代も。実戦で危ない橋渡る必要もない・・・いざって時まではだけどな・・・」

『そのいざって時のために機体を整備しときます。』

「追加装備の制圧用スタンガンソードとスタングレネード弾、拘束用ロープはどうなっている？」

『新技術を使っているわけでもないので、もう完成してあります。』

「すまないな。」

『それが私の存在理由です。』

で、クラリッサさんに報告したのだが俺の得た情報など上層部にあてにされず、いまだテロが続いている。

というわけで機体テスト込みの武力介入に移行する。

武装拠点（テロに使われている爆薬、銃器）は3ヶ所、マーシャル諸島・南米の山間部・大西洋を航行している武装艦。

海に落ちた時のために酸素マスクを一応インストールしておく。
（原作道理にならなきゃいいんだがな。）

人気のいないところでＩＳもどき

ガンダムを展開する。

ステレス機に足をはやした様な、翼のところにハンドミサイル・脚部にはテイルユニットを装備した暗闇の様な黒にところどころに橙色を塗装された機体。

「「アブルホール」目標へ飛翔する。」

マーシャル諸島の武装拠点に到着。夜であることを利用して襲撃する。

翼についているハンドミサイルとテイルユニットのミサイルで武装倉庫を破壊する。

そして、すぐさまスタングレーネード弾と睡眠弾を投下して武装勢力を無力化する。

で、拘束用ロープでこれでもかという程巻き、ついでに武装も解

除（というか破壊）してからその場から去る。

時間は5分にも満たない。奇襲という事もあって相手からの抵抗がほとんどなかったからこんなに早かったのだろうが。

「目標達成、次の目標に向かう。」

南米の山間部上空に到着して「アブルホール」から全身から夕陽の緋を被ったような「アストレア」に変え両手にＮＧＮバズーカを装備。弾の種類は煙幕弾。

ついでにクラビカルアンテナを外してＧＮランチャーを装備。

その状態で石の建造物に砲撃。その後ＧＮランチャー・右手のＮＧＮバズーカを量子化して戻し、スタンガンソード（二本の円柱の付いた剣）を右腕に・ＧＮシールドを左腕に装備する。

今回建造物の中に爆薬・武装があるため内部を制圧しなければならない。

さっきの攻撃で破損した壁から侵入する。

煙幕弾で姿を隠しながら右腕のスタンガンで相手を気絶させていく。あてた相手がものすごい痙攣を起こしているが・・・・面白くて仕方がないんですねど（笑）。

マシンガン・バズーカなんかで相手は抵抗してくるが、ガンダム

の装甲には傷一つ付かないさらにシールドも張っているため衝撃も少ない。

逃げようとしている奴がいるがＮＧＮバズーカの煙幕弾を当て相手を倒しそこからの煙幕から近くにいる奴らも気絶させていく。

どうやら今逃げようとしている奴らで最後なので、拘束し・武装を破壊して最後の目標に向かう。

また「アブルホール」で移動してから「アストレア」に変えプロトＧＮソード・ＧＮシールドを装備し戦闘艦に突進する。

弾膜を張ってきているが小刻みに左右上下に動いているので当たらない。

そのまま、側面を切り上に上昇して急降下。戦艦の中央に突撃するように着地して砲台を切り続ける。

砲台を破壊し終えて立ち止まったその時、『下から熱源接近』

下から延びてくるのは二つの鉄の蟹の様なハサミ。

そのハサミに両足を拘束され海に引きずり落とされる。

海の中で見たのは武装された海中探索機であった。

ハサミは足を切断しようとしているがガンダムには効かない。そのうざったいハサミをプロトＧＮソードで切り裂く。
相手は後ろに下がって魚雷を撃ってくる。

（・・・そんなもの・・・）

魚雷がＧＮシールドに当たり大量の泡が発生される。
その中から海の藍とは対比の緋の機体が現れる。
そして、無慈悲にプロトＧＮソードを掲げ相手に振りかざす。
一応、パイロットは爆発する前に引きずり出し拘束する。
死人とか出たら後味悪いからな。

その二日後くらいに、各国の軍が動き始め鎮圧された武装拠点で武装員を拘束したらしい。
武装員は「あれはお前らのＩＳではないのか！？」とか「あれは・・・悪魔だ・・・」とか言っていたらしいしく、世間がそれを『正

体不明ＩＳ現る』やら『正義の味方か？悪魔か？』とか騒がれていたが３ヵ月もすればその噂は氷が解けるように消えていった。

テロ事件発生　（後書き）

さすがに無茶があったかな・・・・？

弟子

テロリストを無力化したＩＳは正体不明・確認不能なため「亡霊」と名づけられ各国の諜報機関が捜査に乗り出したが発見できなかった。（まぁ、早々発見できるわけねぇだろ？　こっちは細心の注意払っているんだぜ？）

あのテロ事件から４ヶ月、女尊男卑はさらに加速し一部の女性は男性を奴隷とさえ思うやつが出てきた。まぁ、俺はそんな奴イヤホンで音楽聴きながら無視しているが。

今後テロ事件や白騎士事件の様な戦闘がある様な気がするので、（もう原作に介入するのは確実な気がする。）　修理作業機や予備の部品を作っていこうと思うのだが、現在ＧＮドライブは５つしかない。もし破壊された場合後がないため、製造できる木星に行ける技術とこの世界でＧＮドライブが製造可能かを調べるために１０個作れるぐらいの素材と大量の「ハロ」と作業用カレルを乗せて木星に飛ばせる船・・・。

確か、機動戦艦「ナデシコ」とか単機で大気圏離脱できたっけ。

第三世代よりも前に「ナデシコ」を建造することにした。

まず作業場だが昼でも薄暗い森の中のゴミ捨て場です。どうやら管理している人がずぼらな性格していて管理を怠っているのか、不法投棄がいっぱいあります。

そこから部品やコードを使っていたりしていた。

え？　金持ってんだから金払えって？

だって、時々使えそうな部品とかコードとか転がってんだ。リサイクルして何が悪い！！

そして、できたのが機動戦艦「ナデシコ」（光学迷彩装備）とハロｘ２５、作業用カレルｘ２０

この「ナデシコ」だが原作よりも小さい、全長９９ｍ・全高３５．６ｍ・全幅４９ｍだ。人が入るわけじゃないし原作道理の大きさにする気はなかった。

相転移エンジンも核パルスエンジンも小型であり、グラビティブラストなんて装備していない。戦闘に行くわけではないし。

（原作では全長２９８ｍ・全高１０６．８ｍ・全幅１４８ｍ。だいたい３分の１だ。）

見つかっていろいろといわれるのが嫌なのでＩＳのコアに量子化して収納して見つからないようにしている。（コアの自己進化のおかげなのか知らないが、だんだんと容量大きくなっていないか？）

そして、見つかるのが嫌なので光学迷彩張りながら木星に行ってもらった。

できたかどうかはエイダを通して教えてもらう事にする。

そして、Ｚ・Ｏ・Ｎ（ＺＯＮＥ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＥＮＤＥＲＳ）であった「メタトロン」もついでにもって来させようかという事で「ナデシコ」の輸送箱（ＧＮドライブを地球に向けて送り出す箱）を多く積みこませた。

今日はフェイラさんに訓練所に呼び出された。フェイラさんの呼び出しなら拒否せず行くぜ！　気分的に光の速度で！！

ん？　フェイラさんが呼び出すとすれば研究所の方じゃね？　と気づいてしまったがもう入り口なので扉を開け入る。

ん？クラリッサと同じく眼帯をつけた少女がいる。

銀の腰にまで伸ばした髪、俺とは少し色味が違う赤い眼をしているが、俺の眼は眠たく疲れた様な感じがするのに対し彼女の眼は冷たく鋭い感じを受けてしまう。

（まさか・・・）

と思っていると、クラリッサが俺を倒して頭を踏みつけてくる。

「ようやく来ましたかウスノロ。」

「おはよう。そして足どけろ。」

「・・・こういえば男は喜ぶと書いてあったのは嘘なのでしょうか？」

一部の奴らにはご褒美だと思うぜ。

「で？　なんで呼んだのフェイラさん。」

「ちょっと頼みごとがありまして。」

「なぜクラリッサが答えるし。」

「私がアキラの番号を知らないので、フェイラさんに頼みました。」

だろうと思ったよ。

「実は鍛えてほしいのです、このラウラ・ボーデヴィッヒを。」

「やだ。」

『面倒だからですね。』

「当たり前だろうが。」

「そこを何とか。」

「クラリッサが教えればいいでしょが。」

なぜ原作キャラと関係をつくらにゃならん。

「転勤になりました。」

「はぁ？　どこに？」

「黒ウサギ部隊です。」

「・・・なめてんのかその部隊名・・・」

原作でもあったけどさ。

「アキラくん、黒ウサギ通称であって正式名は「シュヴァルツェア・ハーゼ」だよ。」

「貴様が生身でＩＳと戦闘したというのは？　とてもそうは見えんな。」

「そうだろ？　俺みたいなやつの指導とかあんたもうけｔ『手は抜かれましたが本当ですよ』・・・。」

エイダァァァアアアア

「まぁ無駄だとは思うが受けてみよう。」

俺は面倒事に巻き込まれつつあるようだ。

で、基礎訓練と射撃訓練は一緒にやり・ＩＳの動かし方・基本知識のアドバイスをしていく。

最初は俺の教え方が悪かったがだんだんと分かりやすく教えられるようになったと思う。

これも「経験値急増蓄積」のおかげなんだろうドイツ語も3日で話せるようになったし。

ＩＳの動かし方では模擬戦をすることで身につけようとする。俺がハリセンを持ちラウラは出力を落としたプラズマブレードで試合をする。

最初のころは蝿が止まるような動きだったので素振りとイメージ訓練を優先した。

だんだんと速く動けるようになってきたので俺にあてるように攻

撃してくるが、何度も千冬の剣を避けているので当たらない。

そして、普段の訓練とほぼ同じ速度になってきたときはプラズマブレードを避けた後、ハリセンで横腹や足首などを叩いてやりより実践的な近接戦闘をしていた。

まぁ、7ヵ月ぐらいしていれば代表候補制の下ぐらいにはなってきたのではないだろうか？

そんなラウラが生身の俺と模擬選をするとどうなるかというと

ハリセンを横に薙ぎ払うがラウラはＩＳを下がらせ簡単に避けてしまう。

「チッ」

そして、前進しながらブレードを振りおろし切り上げ、また斜めに切ってくるが俺は数ミリ先で避け続ける。

反撃しようとハリセンを振り下ろすが踊る様に回転し避け、そのまま横に切ってくる。

倒れこむ様に前転して避けるが、そこはラウラの足元。

容赦なく蹴り上げられ飛ばされてしまう、そして地面にたたきつけられラウラが起きようとしていた俺の首元にブレードの刃先をち

ょっと手前に置く。

そこで模擬戦終了

もうラウラは生身の人間に後れをとることなぞないだろう。前のＩＳ適正結果Ｂだったし。

「もう俺が教えることないんじゃね？」

「まぁ、そうかもしれんが私はアキラに教えられたり模擬戦するのは嬉しいぞ。」

「最近は模擬戦でなぶられているようにしか見えない。」

「そんなことを言うなら最初ハリセンで叩きまくられた私は屈辱でしかなかったのだが。」

「いくらなんでも酷過ぎるいう事で素振りに変更しただろうが。」

「・・・なんでアキラは私を侮蔑しないのだ？」

「・・・はい？」

「私は戦うためだけに生み出されたが『出来損ない』の烙印を押された。大抵の奴は嘲笑するか侮蔑するかのどちらかだ。なぜアキラはそういう事をしない？」

あーそういえばそういう事クラリッサから聞いてたな。

「一言でいえば面倒。」

「は？」

「だってこれから教える相手と関係気まずくするの嫌だし？　強くなったらなったで報復されるのが嫌だからじゃね？」

「なぜ疑問形？　というよりそれだけか？」

「まぁ、それ以外にも理由としては、戦う事だけがラウラの存在理由じゃねぇだろ？」

「いや、私は戦うために生み出された存在だぞ。」

「最初は戦うための存在だとしても人っていうのはさ自分を変革させていくことができるんだぜ？
まぁ、変わる変わらないは本人の意思だがな。」

「・・・・・私も戦う以外の存在になれるのか？」

確か原作では一夏におとされるんだったけ。

「なれるぞ。」

そんな話をしているうちにラウラの携帯が鳴る。

「上層部からの呼び出しだ。いってくる。」

「いってらー。」

ラウラは上の所に、俺は家に帰宅する。

それからラウラがクラリッサと同じシュヴァルツェア・ツヴァイクに移動になったのを後日知った。

弟子（後書き）

機動船艦→機動戦艦に変更

また、ナデシコの建造とかどうやって作ったなど指摘を受けたので

大幅に編集しました。ご迷惑お申し上げます。

小説読み返してみたら「シュヴァツェア・ツヴァイク」じゃなく

「シュヴァルツェア・ハーフ」でした

誘拐事件

現在俺はドイツでおこなわれているモンゾグロッソ？モンデグロッソ？

まぁ、どっちでもいいか。

で、第二回モンゾゴロッソ？に来ている。

昨日フェイラさんが「友達が急用で観戦券余っちゃたんだけど見に行く？」と言われたので見に来た。

・・・最初に呼ばれなかったのが悲しいです。

「あの狙撃銃かっこいいね。うちでも作ってみようか？」

「うーん。どうせ作るならさっきの連動式グレネードの方がいいんじゃね？火力すげぇし。」

『私は相手側のレーザーライフルがいいと思います。エネルギー効率がよさそうです。』

フェイラさんとエイダと雑談（もしくは分析）をしながら試合を見ていく。

とブリュンヒルデ・凶暴幼馴染・人の皮をかぶった鬼・こと織斑千冬が「暮桜」を纏い現れた途端。

「「「「「「キャァァアア――――――おねぇ様ぁぁああ――――――」」」」」」

「あっ。お姉さまが私を見てくれたわ！」

「なに言ってるの私よ！」

「いいえ、わたくしです！！」

とすげぇ歓声と熱狂。

「すげぇなおい。」

『あなたとは対比的な、というよりもう足元にも届かない存在になりましたね。』

「今さらな気がするがな。」

「え！？　アキラくん織斑さんと面識があるの！？」

「あれ？　言ってなかったけ？　一応幼馴染だけど？」

「友達から「サイン貰ってきて」って頼まれてるの！　私も欲しいし、何とかしてもらえない！？」

頼めば別にもらえる気がするが・・・

って　サインとか写真とか売ったら儲かりそうだな・・・俺の年収超えたりする？

・・・・するな確実に、だって目の色がすげぇ色してるもん。（どういう色かは想像してください）観客席見渡すだけで９割以上いるし・・・

・・・ってそんなことより思い出した。大会決勝に一夏が誘拐されるんだった。

どうやら数年たっているうちに記憶が薄れつつあるようだ。

今はまだ決勝戦ではないが、警戒しとこう。というより一夏を警護しといたほうがいいか？

「ねぇ！　アキラくん！！　聞いてる！？」

なんか怖いんですけど。

「え？　ああ、まぁ、あっちに暇があるんだったら・・・」

「ありがとう！！」

で、試合が終り、携帯で連絡を取り今控室。

「えーと。俺の主任のフェイラ・フォーリンさん。で、知ってるとは思うけど凶暴幼馴染、織斑千冬。」

「私の紹介がおかしいだろ。」

「正当な評価だ。」

「あっあの！　フェイラ・フォーリンです！　織斑さんの噂はかねがにぇ・・・っ！」

どうやら舌をかんだらしい。・・・萌えぇ。

『ドガッ！！』←俺の足が千冬の足に踏まれるそうになるのを避け、千冬の足が地面に当たる音。

・・・・いくらなんでも音大きくね？　床が５ｃｍぐらい沈んでるし。

「はぁ・・・何か用か？」

「すっすいません！！」

「いえ、フォーリンさんではなく、この馬鹿に言っているのです。」

「まぁ、まじめな話と　フェイラさんの友達のサインのお願いとあるけど？」

「あ、色紙もってきました！！　友達と私のとお願いします！！」

「はぁ、・・・・こんなのでいいですか？」

「ありがとうございます！！　家宝にします！！」

・・・それほどのものか？　俺が貰ったら一瞬でゴミ箱行きなのだが。

「今なに考えたアキラ？」

「・・・すげぇ人気だなと。」

嘘じゃねぇからごまかせたはず！！

「まぁいい。で、まじめな話というのは？」

「不確定情報だけど一夏が誘拐される。」

「・・・・・なぜだ？」

「千冬の事、妬んでいたり気に入らない奴がいるらしくてな。あと束にも気に入られてるだろ？　で、護衛くらい付けとけという話。」

「そうか・・・そうだな。」

どうやら護衛を付けてくれるようだ。亡国機業に攫われる。とはさすがに言えない。

あつら、エイダでもどこにいるかわからないと言う。そんな存在を俺が知っていたらおかしく思われる。

「信頼のおける人間を付けよう。」

「で、一夏は？」

「今は会場にいるだろう。ちょっといいか？」と言って携帯を取

り出す。

「すいませんが一夏の護衛をお願いできますか？　理由？　なにやら妬んでいる人がいるらしく、心配で・・・ありがとうございます。」

「どうですか？」

「護衛を3人ほど付けてくれるらしいです。ありがとうございます。フォーリンさん。」

「え！？　あっいえ、あの」

フェイラさん、さっきからきょどりすぎじゃね？　まぁ、かわいいけど・・・

「情報提供者は俺なのだが・・・」

「フンッ。」

まぁ、いいけど・・・

「じゃ、俺は一夏と話してくる。」

「ああ・・・ありがとうアキラ。」

その言葉は、俺とフェイラさんが扉から出た後だったので聞こえ

なかった。

「あっ！　おっす。アキにぃ。」

黒ずくめの男3人に囲まれた一夏が俺達を見つけ声をかける。

どっちかっていうと護衛が怪しい気がするのだが？

「おひさしぶり。一夏。」

「はじめまして。一夏くん。」

「アキにぃ。この人は？」

「ああ。俺の主任のフェイラ・フォーリンさん。」

「よろしくね。一夏くん。」

「よろしくお願いします。フォーリンさん。」

その後、俺のここ最近のドイツでの生活や、一夏の転校生の話など（リンがとか言っていたので原作の鈴だろう）を話していた。

決勝当日、一夏が誘拐された。

どうやら護衛を倒し、護衛になりすまし一夏を攫ったらしい。

「はぁ・・・」

『どうしますか？』

一応、一夏の居所を調べドイツ軍に報告はした。人気のない廃棄工場らしく地図では周りは森に囲まれている。

「うーん・・・」

千冬だけでも問題ない気はするが・・・

「とりあえず障害があったら排除しといたほうがいいよな？　原作とは違う可能性があるわけだし。それに正確な描写がなかったからなぁ・・・」

しばし考えた後。

「前みたいに後追って、危険になったら出るという事で。」

『ストーカーですね。』

うるせぇ。俺は千冬ファンじゃねぇ。

「アブルホール」を人気のないとこで胸に下げた懐中時計から呼び出す。

「「アブルホール」目標へ飛翔する！」

脚部から碧の光を撒き散らし一夏の所に飛ぶ。

『イタリア製第一世代ＩＳ「Ｐｒｉｍａ」・デュノア社製第二世代ＩＳ「ラファールリヴァイヴ」が目標地点付近から接近してきます。おそらく亡国機業と思われます。』

「・・・・2対1じゃさすがにきついか？　急ぐぞ。」

『了解。・・・「暮桜」と接触、戦闘行動に移りました。』

俺の援護なんて必要ないとは思うが・・・無事でいろよ？　いろいろとめんどくさそうだし。

Ｓｉｄｅ　千冬

センサーに「ＩＳ２機確認・警告！ＩＳ射撃体勢に移行。」と表示された時は驚いた。ＩＳは企業・各国家群が所有しているはずだ。誘拐犯が企業・国家ならば分かるがその可能性は低いだろう。

別々なのだ。

「Ｐｒｉｍａ」はイタリアの第一世代・「ラファールリヴァイヴ」はデュノア社の第二世代。

企業・国家ならば同系統の機体を使うだろう。現在ＩＳはまだそんなに数は多くないはずだ。

「貴様ら、亡国機業か？」

それならば納得がいく、正体不明で最近の目標は「ＩＳ」。ならば別系統のＩＳを使うのもわかる。

バイザーで顔を隠されているし声にも応じないから、正体はわからないが。

（どちらにしよ一夏を連れて帰る。それだけだ。）

と、「ラファールリヴァイヴ」の手に　２ｍの実弾系スナイパーライフル「シャインラン」が握られ撃ってくる。

それを突き進んでいる体制で機体を回転させ速度を落とすことな

く避ける。それと同時に瞬時加速（イグニッションブースト）で一気に接近し雪平を相手の左側から切り込み、装甲を破壊し吹き飛ばす。

また、右側にいた「Ｐｒｉｍａ」から脇に抱えられたアサルトマシンガンから攻撃を右側に受けるが、ほんの３発程度、かすり傷なので続けざまに「ｐｒｉｍａ」の方にも切りつける。

復帰したのか「ラファールリヴァイヴ」からミサイルが撃たれ避けようとするが、足を掴まれてしまった。

だが、ミサイルは「暮桜」には到達せず横からの粒子ビームによって破壊された。

足に掴まれていた手を雪片で破壊し拘束を逃れる。

ハイパーセンサーは映りが悪く、といっても視界が少しぶれる程度で問題はないが、ＩＳの接近警告なんて出ていないはずだ。

その時、数年前の白騎士事件を思い出した。あのときもレーダーに映らず、警告もなかった。

そして、接近してくるステレス戦闘機に脚を付けた様な黒い機体から碧色の光の粒子が出ていた。

（あれは、味方なのか？）

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

（おいおい。）

その時、俺はどっちに呆れていただろうか？　ＩＳを使っての妨害行動という面倒なことをしてくれた亡国機業の方？　それとも最強の座でありながら攻撃を受けてしまいそうだった千冬の方？

（まぁ、どっちでもいいさ。）

そう、どうでもいい。今やるべきことは１つだけなのだから。

（邪魔な奴らをぶっ飛ばす！）

翼についているハンドミサイルからミサイルを一斉発射し動きが遅いほうの丸い朱色の球体を肩、脚に付けそこから細長い竹の様な筒を伸ばした機体「Ｐｒｉｍａ」を襲う。

黄色い色から爆発し赤い色に変わったミサイルはシールドエネルギーを喰らう。

爆煙から出てきた「Ｐｒｉｍａ」は爆煙で見えなかったのか「暮桜」の雪片によって一線・二線と次々叩きこまれる。

「ラファールリヴァイヴ」が呼び出したライフル（長さ１ｍで細長い箱）で「暮桜」を離すことに成功するが、「アブルホール」のバルカンとビームには気づかず直撃してしまった。

そのまま俺は「ラファールリヴァイヴ」に突撃し変形して慣性を殺さずに蹴りを入れ「暮桜」の方に弾き飛す。

そして、「暮桜」は飛ばされてきた「ラファールリヴァイヴ」の後ろから雪片を横に構えながら接近し、横に一線。

だが、後ろからの「Ｐｒｉｍａ」のアサルトライフルの攻撃によって追撃できなくなってしまう。

とそこで、エネルギーが少なくなってきたのか雪平が淡い水色の光が消え実剣になってしまう。

また、見抜かれたのか両者がミサイルポッド（４つの砲門があるコンクリートブロックを大きくしたようなもの）からミサイルが放たれる。

この距離では、バルカンは減衰して威力をなくして破壊できるか怪しい・ビームライフルでは落とし切れない・ミサイルでは追いつかない。

（間に合え！）

俺は、セファーラジエル（第五形態）を呼び出しプロトビットを展開させミサイルを撃ち落とす。

１発逃してしまったが「暮桜」は難なく避け、「Ｐｒｉｍａ」に接近し零落白夜を使って機能停止に追い込んだ。

ってシールドエネルギーまだあったのね・・・

「ラファールリヴァイヴ」は動けなくなった「Ｐｒｉｍａ」を抱えて撤退していく。

「・・・アキラ。なんでお前がＩＳに乗れる。」

どうやら、あせり過ぎたらしくバイザーをつけ忘れたらしい。

・・・・なんて間抜けなんだ・・・・おれ・・・・

「あー。後で話せない？　一夏を救いださないといかないし。」

「・・・・・・わかった。」

しぶしぶと千冬は引き下がってくれた。

誘拐事件（後書き）

いまさらですが、ガンダムの待機状態　というよりも収納しているのは

アキラが胸から下げている懐中時計に収納しています。ちなみにエイダからの声もそこから出ています。

ちなみに「ラファールリヴァイヴ」はこの時代の最新鋭ＩＳで、

「Ｐｒｉｍａ」と同じく研究所から奪取されました。

雪平→雪片に修正

何か長すぎる様な気がする。

原作より少し前

あの後、事件が収縮していったころに千冬がドイツに教官として来た時に、話をした。

伝えたことは

ガンダムはＩＳの技術を使っているがＩＳのシールドエネルギーや絶対防御がないという事・この事件はなかった事にしてほしいという事。

シールドエネルギーや絶対防御がないと言った時、「貴様はアホか？」と言われたが・・・なんで？

黙っていることの理由としては、目立ちたくないのとマスコミの追求が嫌だったのだ。

「まぁ、いい。お前が面倒なことが嫌いなのは知っているしな。」

「ありがと。」

と会話を終え、訓練に向かった。

そして、一年の訓練期間（教官期間かこの場合？）を、終え空港で見送った。

それから、１・２年たち第三世代ＩＳの制作が研究所に要求された。

俺は、ガンダムＳＥＥＤの「ストライク」・「フリーダム」

アーマドコア　ｆｏｒ　Ａｎｓｗｅｒの「ホワイト・グリント」・

「ノブリス・オブリージュ」

の設計図を提出。

そのうち、「スタライク」は第二世代と分類されたが（それでも量産機として開発を進めるらしい）他の三機は第三世代と分類されアメリカと共同開発する事となった。

え？　なんでアメリカとだって？

「ホワイト・グリント」「ノブリス・オブリージュ」はヴァンガード・オーバード・ブースト（ＶＯＢ）を装備することを前提に設計してしまった。

そして計算上・・・第一宇宙速度でました。（地球にある衛星がある場所まで行ける速度）

原作では時速２０００ｋｍが普通だったが、ＩＳの技術のシールドエネルギーを推進力にまわし、ＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンサラー）や重さがＡＣとＩＳではものすごい差がある、などいろいろな要因を含めた結果が、２８４００ｋｍ以上のスピードがでたという・・・。

「キュリオス　ガスト」・・・・・イラネェンジャネ？

マジでそんなこと思いました。（趣味で作りますけどね！！）

で、ドイツ政府は宇宙開発が盛んなＮＡＳＡと協力して作っていった方がいいだろうという事で、アメリカ政府に頼んだらしい。

適正とか専用機にするかとかの話は置いといて実験機にするらしい。まぁ、使いこなせる相手がいたらそれをベースに調整して専用機にするらしいが。

まぁ、どんな事情があるのかないのかは知らないし・知りたくもないね。

原作で出てきたラウラの専用機「シュヴァルツェア・レーゲン」はドイツが国の象徴・威信にかけて独自開発するらしい。頑張って

もらいたいね。同じ研究者・技術者として。

で、今アメリカの研究所で「フリーダム」「ホワイト・グリント」「ノブリス・オブリージュ」をつくっている最中だ。完成度５０％未満で背中の？状になる翼・砲身が隠されている翼・砲身自体が翼や半身・プライラルアーマ（ＰＡ）ができていない。

（プライラルアーマーはコジマ粒子ではなく、シールドエネルギーを空気中に散布させバリアー状に機体に張り巡らせた。そのためシールドエネルギーを使い続けるが１０分使い続けエネルギーが２０減るか減らないかという高燃費。

効果はダメージを直撃したときよりもシールドエネルギーの減少率が低くなり装甲が壊れにくくなるといものだ。）

そして、同時開発しているためドイツの暇な研究者（フェイラさんも）やら技術者も来ている。

そいつらが「うひょ～！　久々の兵器開発だぜ！」とか「魔改造してやんよ！」とか「はぁはぁ・・・」とか「すごすぎるぜ！　すごすぎて話にならねぇよ大将！」と狂喜乱爛としていたが大丈夫か？

「「「「大丈夫だ！　問題ない！！」」」」

と返してくれた。なら問題ない。

ちなみに提出した制作図には『全身装甲』だったが、ＩＳは象徴（多分だが女性の）という事もあるため、上腕や大腿（膝から股まで）・横腹・目や頭部の装甲が撤去された。

で、研究所内の自動販売機の前にあるベンチでくつろいでいる。

「ふー。」

いくら開発やいじくるのが好きでも休憩は必要だぁぁ…。

「うーん。やっぱスタビライザーも付けて重心移動とかも付け加えてみるかな？　いや、いっそブースターを増設させてスピード強化してしまうか？」

「いくら研究所内でもそういう機密事項ぽんぽん言わない方がいいと思うんだけど？」

いかんいかん思考が外に漏れ出しているみたいだ。と目の前にいるのは鮮やかな金髪の女性。

「・・・一応身内でしょここ？」

「スパイがいるかもよ？」

「あんたがスパイじゃねぇの？　見かけない顔だし警報鳴らしていい？」

と俺は隣にあった警報装置（実験で失敗し危険な時・情報漏洩を

防ぐなどの理由でいたるところに警報装置がある）のボタンに手を伸ばす。

「ちょっまってぇえええ！！」

うるせぇ。研究所に響いたんじゃねぇの？

「で？　あんた誰？」

「テレビとか雑誌とかに出てるでしょ！？」

「いや、忙しくて見てないし。」

「はぁ。これだから研究者ってのは。」

何か馬鹿にされたな。気にしないけどさ。

「ナターシャ・ファイルスよ。国家代表の。」

そういえば原作でいたな。よく覚えていないが。

「で、その国家代表がなんで研究所にいるの？」

「あの子の様子を見に来たのよ。」

「あっそ。」

「連れないはねぇ。そんなんじゃ一生彼女ができはしないぞ？アキラくん。」

「・・・なんで名前知ってんの？」

「フェイラちゃんが「すごい子が来ている。」って言ったからあの子を見るついでに見に来たんだけど、外見からじゃすごいなんてわからないわね。」

フェイラさんの知り合いか。

「だったら様は済んだろ？　あの子の所に言ったらどう？　おれはあんますごくない根暗ニート志願者だよ」

「・・・・・・謙遜はいいけど・・・ニートはどうかと思うわ。人として。」

「俺のささやかな夢にケチつけないでください。」

「もう、本当にＩＳ４機の設計図書いた人とは思えないわ。」

「というかあれは趣味です。」

「趣味でＩＳの設計書ける人どのくらいいるの！？」

「とりあえず・・・俺含めて１０００はいるんじゃない？」

そんなことしてそうなドイツの研究者多いと思うし、他の国探せ

ば結構な数になると思う。

「いつからマッドな世界になったの！？」

「さぁ？」

「・・・・まぁ、いいわ。で、あなたに私のＩＳを見てもらいたいんだけどいい？」

「いや。」

「なんで？」

そんなの

「面倒だからに決まってるんじゃん。」

「私からもお願いしていい？」といつの間にかフェイラさんの登場。

「・・・機密じゃないんですか？」

「上層部にお願いしたらいいっていられたよ。というより見せて強化しろって。」

・・・恩でも売っとけってか？

「強化するのは別ならいいけど。」

「じゃ行きましょ！！」

で、『銀の福音』（シルバリオ・ゴスペル）の所に来たまではいいのだが・・・。

「きれいだねぇ。」

「まぁ、シルバーですからねぇ汚くはないでしょ。」

「ひんやりしてそうだね。ちょっと触ってみようよアキラくん。」

「え？ちょっ、まっ・・・」

不意を突かれてしまい。フェイラさんに腕を掴まれ（フェイラさん軍人並みの腕力持ってんじゃないの？と思ってしまう程の腕力）『銀の福音』に触れてしまっい・・・・

「「え？　ＩＳが反応してる・・・？」」

他の研究員が電話を取って話をしているが、俺のことなんだろうなぁ・話している相手は上の人なんだろうなぁ。

と、ばれてしまいました。

それから１７時間後、一夏がＩＳを動かした。

メンドクサイナァ

原作より少し前（後書き）

次回から原作介入

「クラスメイトはほとんど女」

クラスメイトはほとんど女

いみ　「あっくん。手伝ってぇぇぇぇ！」

俺あれからアメリカの研究所から車で護送され（もしくは連行）て保護目的で（もしくは監視）の名目でＩＳ学園に入学することになってしまった。俺は日本に渡り暇だったので、監視付きの人里離れた家で寝ていたのだが。目の前には現在失踪中の天災馬鹿ウサギこと篠ノ之束がいる。

「・・・・ここはどこ？　そして私はだれ？」

「え？　まさか連れ去っちゃう時に頭ぶつけちゃった！？」

『もともと壊れていると思うので大丈夫でしょう。ちなみにここは倉持技研の開発室です。』

そこには未完成で飾り気のない白の装甲が腕や脚部が開いていていて、中のコードや灰色の部品が見えるＩＳがあるがそんなこと今はどうでもいい。

「おい。どんな方法で連れ去った？」

「え？　うーんとね、バズーカとかグレネード撃ち込んで混乱してるとこを連れ去っちゃった！」

俺は「アストレア」の腕を部分展開させ逃げられないように束の頭を掴む。ＩＳと生身の差は歴然だが潰れようがどうなろうが関係ねぇ。

「俺を殺す気か？」

「いたったいたいたぁぁぁあああい！　頭がががつぶれちゃうぅぅぅぅぅ！！」

『話が進みませんのでもうそろそろやめましょうか。変な液出てきてますし。』

「それもそうか。」

と俺は束の拘束を解く。

「ほんと容赦のないね。」

「俺の愛情表現だ。」

「え？　もしかしてこくｈ・・・」

「冷蔵庫の裏にいるＧぐらいの愛情だけどな。」

「それって嫌いってことだよね…（、・ω・、）」

なにをいまさら。

「で、手伝えって？」

「んーとね。いっくんにあげるＩＳ作ってるんだけどね私が作ったＧＮドライブ付けたいの？　いい？」

「・・・いいぞ。一夏ぜってぇ狙われるからな。」

ＧＮドライブの所為で狙われるかもしれないが、まぁ、もともと狙われる可能性でかいから、力は持っておいて損はないだろう。

「さすがあっくん！　話がわかるね！　あっくんも手伝って！」

といって俺は束と一緒に「白式」をつくる。

「白式」のＧＮ粒子は夕陽の様な朱色だった。念のために調べたが悪性のＧＮ粒子ではなくてほんとよかった。

原作と比べこっちの「白式」はＧＮ粒子を防御に４割・機動に４割、回している。

さらにＧＮ粒子を発生させるために、シールドエネルギーを使っているらしいがそう多くなく起動時にシールドエネルギーを３０程使い４０分は生産し続ける。

また、雪片に残りのＧＮ粒子を使ってバリアー無効化攻撃に加えもともとの攻撃力が上がっている。

さらに俺が雪片のシールドエネルギーの攻撃変換率を改良し軽減させた。

・・・・・・やっていておいて何だがさすがにやり過ぎじゃね？

まっ、いっか。

あらためてみると本当に性能ピーキーだな。近接兵器一つって。

で、後は微調整と「初期化」（フォーマット）・「最適化」（フィティング）だけになった。

ここまでで２１時間チョイたった。不眠不休で。

「あっ、束。これ見てくんね？」

「ってこれ・・・ＩＳのコアじゃん。」

そう、前々から俺が束に貰ったＩＳのコアを参考に改良を加え・・・つくっちゃいました。

「作成者からしたら、完成度どのくらい？」

「うーん。自己進化能力の速度を上げようとしているのはわかるんだけど・・・あんま速度変わんないよこれ？」

えー。

「・・・という事は失敗？」

「性能的にはほとんど変わってないからＩＳに使っても問題ないよ。ブラックボックスになってるのにつくちゃうなんて反則だよぉ。」

「それが俺の能力　開発チートだ。」ドヤ顔で言ってやる。

「ワー、パチパチ。」

自分でやっててなんだけど・・・うぜぇな。

「このコアどうするの？」

「ガンダムにシールドエネルギーや絶対防御を乗せるだけ。」

「さすがあっくん。８機以上のＩＳとたくさんの追加装備を収納するのにコア丸ごと１つ使って、能力を持たせるためにコアを使って。こんなにお金使って贅沢なＩＳなんてないと思うよ？」

「お前のつくっているＩＳはどうなんだよ？」

「ものすごく使ってるね・・・。けど、量産機の２倍くらいだよ。」

俺の場合、第二・第三世代の８機、それに追加装備や他の作品の

装備・・・。単純計算で８倍・・・。これでもうニート生活できてたんじゃね？

「よーし！　手伝ってくれたお礼に束さん奮発して手伝うよぉおおお！！」

「まぁ、ありがたいのか不安でやめてほしいのか微妙なとこだがお願い。」

と、ガンダム全機にＩＳの能力を持たせる。

それが終わったのが１０時間後。

そして、帰ろうとしたのだが日本政府に捕まってしまい「保護する」と言われＩＳ学園に連行された。

・・・・・何時間も寝てねぇんですが。そんなに強く引っ張らないでください。

俺は、「アブルホール」でアリーナに飛び出て宮本武蔵を待つ佐々木小次郎のごとく、待っている千冬を肉眼でとらえる。

で、今「打鉄」を纏い刀を装備している織斑千冬がいる。

「本来なら試験日はもう過ぎているのだが特別試験だ。私がやってやろう。」

「・・・そうすっか。」もう、抵抗なんて無駄なのか。

そして、試合が開始される。

俺はバルカンとビームを放ちながら突進し、千冬は左前右前に滑る様に回避しながら近づいてくる。

そして、剣を振ってくるが俺は「アブルホール」を空中変形させ、刀は股下を通る。

これぞ『グラハムスペシャル』！！

今この距離からなら当たる。

バルカン・ビームは「打鉄」に向け、ミサイルをできるだけ攻撃範囲を大きくして撃つ。

だが、バルカンとビームを当たりながら突き進み、切ってきた。

刃が顔の横から襲ってくる。それに当たりシールドエネルギーが削られ大きく機体のバランスを崩す。

追撃してきた一撃をできるだけ遠く飛ぶように抵抗なく受け、距離をあける。

そして、人型から飛行形態に変形しテイルユニットのミサイルコンテナを装備しバルカンとビームを最初に「打鉄」に撃ち回避した時に、翼のハンドミサイルとテイルユニットのミサイルを同時に発射し「打鉄」へと襲わせる。

だが、空中で踊るように避け、ミサイルを切り裂く。

そして爆煙に「打鉄」が包まれ見えなくなってしまう。

レーダーで確認してみるが、黄色？　つまり下ってことだよな？

そして、その黄色がものすごい速度で迫ってきた。

そして、下から切ってきた。それを喰らって打ち上げられすぐにテイルユニットを「打鉄」にぶつけるように切り離し人型に変形するが・・・「打鉄」は「アブルホール」の後ろに張り付いている・・・って。

「ここからでは攻撃は出来まい？」

と言って片手で逆手持ちで貫いてくる

だが、俺はハンドミサイルを回転させミサイルを放つ。

当たりはしたが、俺もダメージを喰らいさらに突かれた後だったので俺はシールドエネルギーが０になって試合終了。ちなみに「打鉄」のシールドエネルギー残量は３１２だった。

「やはり腑抜けだなお前は。さて、これがここの制服だ。クラスは１年１組だ。後５０分で授業開始だから遅れるなよ。」

もう何時間も寝てねぇから精神的にきついんです。

「・・・負けたとはいえブリュンヒルデをシールドエネルギーを半分近く削るなんてすごいわね。世界で２番目のＩＳを扱える男性って聞いていたから様子見で見に来たんだけど・・・ますます興味がわいちゃうじゃない。」

そんなことを言っている人が管制室にいたのだがそれはまたの機会。

とっとと着替えて席について俺の意識は闇の中へ沈んでいった

「織斑君。織斑君。織斑君。織斑君。織斑君。織斑君。織斑君。織斑君。ハァハァ・・・織斑君っ、織斑一夏君！」

なんやら声が大きくなっているので重い瞼を開けた。

・・・・おっぱいだ。

山田先生を見たときの第一印象でした。

「は、はいっ！？」

俺より背があるんだな一夏・・・。そして目の前にはおっぱい。貴公がふらやましいよ。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな？　でも、「あ」から始まって今「お」なんだよね。自己紹介してくれないかな？　ダメかな？」

「いや、そんなに謝らなくても・・・・」

そして、一夏は立ち上がり

「織斑一夏です。・・・・・・・・・・・・」

その間クラスの全員の視線が一夏の背中へ矢のように刺さる。

「・・・・・・・・・・・・・・以上です！」

クラスのほとんどが「ガタガタ」とずっこけた。期待しすぎだ皆さん。

『パァンッ！』と一夏の頭が叩かれる。

まぁ、出席簿だ。刀を防具を付けずに叩かれるよりはましだろう。ちなみに俺が受けたのは峰打ちだがな。刃の部分でやられていたら俺もう死んでる。

「げぇっ、関羽！？」

『パァンッ！』これで一夏の脳細胞は1万個死亡。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。」

「あの、織斑先生。会議の方はもう終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな。」

俺は本当に織斑千冬なのか疑った。だって声が優しすぎるもん。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を1年で使い物に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、理解しろ。できない奴はできる

まで指導してやる。逆らってもいいが私の言う事は聞け。いいな。」

その暴力発言こそ俺の知っている織斑千冬だ！

「キャ――――――――！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様にあこがれてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

ものすごくウルセェ。黙れ。もしくは死んでくれ。

「・・・・毎年、よくもこれだけの馬鹿が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

多分だが他のクラスもこんなのじゃね？

「きゃあああああ！　お姉様！　もっと叱って！　罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけ上がらない様に躾して～！」

叱るよりもまず暴力という名の制裁を喰らう事になると思うが、いつから日本はM系女性や百合が多くなったのだろう？

「で？　挨拶も満足にできのか、お前は。」

「いや、千冬姉、俺は『パァンッ！』」これで一夏の脳細胞1万5千死亡。

「織斑先生と呼べ。」

「・・・はい。」

何か哀れだ。

「ちょうどいい。木村お前も自己紹介しろ、手間が省ける。」

・・・・あー、めんどくせぇ。

『パァンッ！』

「とっととしろ。」

俺の動作が常人の3倍はかかるってこと知ってるだろ？（嘘だけどさ）

「木村暁（アキラ）。働くことが基本的に嫌なので将来の夢はニート。」

夢がニートなんて思うやつはいないのかみんな目を開いておりま

す。

そして、現実に帰ってきたようだ。おかえり

「うわっ暗っ」「きもっ」「死ねばいいと思う」

『パァンッ！』

「まともに自己紹介ができない奴がここにもいたな、そういえば。

」

クラスメイトはほとんど女（後書き）

次回　「当て馬として人気のセシリアオルコット登場の巻」

当て馬として人気のセシリア・オルコット登場の巻

「・・・ほんと参ったよ。あきにぃ」

「・・・俺も参った」

睡魔がすげぇんだ

「すみません。一夏を借りていいですか？」

「ん？　箒ちゃん？」

「・・・お久しぶりです。あとちゃん付けはもうやめてください。」

まぁ、１５歳になってちゃん付けを望む人は少ないだろうな

「了解。というわけで一夏、いってら～」

「え？ここでいいｚｙ・・・・」

言い終わる前に箒に腕を掴まれ連行。そして、何分かたった後に予鈴が鳴り戻ってきて授業が始まる

「では、ここまでで質問のある人いませんかー？」

一夏から大量の汗が出てきているが具合でも悪いのか？

「織斑くん、なにか分からない所ありますか？」

「あっ、えーと・・・」

「質問があったら聞いてくださいね！　なにせ私は先生ですから！」

「はい・・・先生・・・」

「はい！　織斑くん！」

自信満々だなぁ、山田先生。

「ほとんど全部わかりません・・・」

・・・・え？

「え？　ぜ、全部ですか？　今の段階で分からない人どのくらいいますか？」

・・・・ほら、いないぞ？　今やってるとこ基本的なＩＳの歴史とＩＳの運用である。

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端にいた織斑先生が聞いてくる。ってか今まで山田先生に任せんな給料泥棒。

「・・・何か言いたそうだな木村」

「いいえ、なにもございません」

「えーと・・・参考書って分厚い黄色の奴ですか？」

「そうだ。必読と書いてあっただろ」

「・・・・・・古いタウンページと間違って捨てました」

パァンっ！

「木村から借りて1週間以内に覚えろ」

「いや、あきにぃに迷惑かかるし1週間であの厚さはちょっと・・・」

「心配ない、そこにいる木村は4日で覚えたぞ」

「あきにぃに出来ても俺には出来な「やれと言っている」・・・・はい。やります」

目が刃物の刃先の様に光ったような気がした。

「とりあえずこれ」

俺は参考書を差し出すした時「あきにぃの暗記力くれないか？」と言われたが、無理に決まってるだろ。

休み時間

「えーと・・・これどういう意味だ？」と一夏が聞いてくるので眠れない。

「・・・これは「ちょっと、よろしくて？」ん？「へ？」」

「まあ！　なんですの、そのお返事。私に話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度があるのではないのかしら？」

うぜぇな。自己紹介の時もいろいろ長くて聞いてなかったし、同じ金髪でもフェイラさんの方がいいや。いや、比べるまでもないか。

「悪いな。俺、キミが誰だか知らないし」

「わたくしを知らない！？　このセシリア・オルコットを！？イギリスの代表候補生にして、入試出席のこのわたくしを！？」

「あっ、質問いいか？」

「ふん。下々の要求にこたえるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って何？」

教室の皆さんが「ズゴゴゴッ」ってずっこけまして、俺も片肘付いてたんだけど顔が滑った。よく見ると、一夏が開いているページには代表候補生と書いってあった

「・・・・・・・」セシリア・オルコット絶句中

「はぁ、一夏。代表候補生ってのは国家代表ＩＳ操縦者に選ばれる可能性がある人のことで、国家代表の手前ってことだ。テレビでいろいろ出てるだろ？」

俺はテレビ見てないけどさ

「だいたい、単語から想像すれば分かるでしょう」

「そういえばそうだ」

一般的な常識のはずなんだが・・・小学生からやり直してみたらどうよ？

「本来なら私の様な選べれた人間とクラスを同じくなるだけでも奇跡、幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？　あなた方」

選ばれた人間ねぇ？　こんな傲慢な奴を選ぶとはイギリスは人材不足なのかねぇ？

「そうか。それはラッキーだ」

「・・・馬鹿にしていますの？」

馬鹿は一夏だと思うぜ？　必読って書いってあったのを捨ているんだから。

「大体、あなた方ＩＳについてよく知らないくせに、よくこの学園に入ることができましたわね。男でＩＳを操縦できると聞いていましたが、一人は知性が低く・一人は性格が暗く、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「もともと俺達は保護という名目が強いからな。勉強してなかろうが、していようがどっちにせよ入れさせられるがな」

本来２１歳で大学生ぐらいだが両親が「研究所に行ってたから高校行ってなかったし、それにＩＳが動かせるんだからもっと強くなって来い」って言われて強制入学。

それに俺も将来ニートになる予定だしな。期待するな

「ふん。まぁでも？　わたくしは優秀ですから、あなた方の様な人間にも優しくしてあげますわよ。ＩＳで分からないことがあれば、まぁ、泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくてよ。何せわたく

し、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」
「まぁ、分からないとこがあったらお願いします」
ないとは思うけどな。
「入試ってあれか？　ＩＳ動かして戦うやつ？」
とっとと会話切り上げたいんだが
「それ以外になにがありますの」
「俺も倒したぞ？教官」
「っては！？」
余計なことを言って話を続けるな・・・って、え？
「倒したっていうか、いきなり突っ込んできたのを躱したら、かってに壁にぶつかって動かなくなったんだが」
んな馬鹿な。例え壁にぶつかってもシールドエネルギーが減るぐらいで（衝撃は防げないと思うが）、戦闘不可能になるわけがない。動作不慮ぐらいしか思いつかないんだが
「わ、わたくしだけと聞いていましたが」
「女子ではって落ちじゃないのか？」

「あなた！　あなたも教官を倒したっていうの！」
「お、おちつけよ。な？」
「これが落ち着いていられ――――」
キーコーカーンコーン　ここで予鈴が鳴る。
「っ！　話の続きはまたあとで！」
嫌だなぁ。俺この人とあんま関わりたくない
「なぁ。あきにぃは教官倒したのか？」
「いや。倒されたけど」
「やはり男なんて所詮その程度ですわね」

だったら戦女神と殺り合ってくれ

今度は織斑先生が教壇に立っている。給料泥棒じゃなかったのか。

「これより再来週行われるクラス対抗戦にでるクラス代表を決める。クラス代表とは対抗戦だけではなく、生徒会の会議や委員会への出席。・・・まぁ、クラス長だな。

自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

「はい。織斑君がいいと思います！」

「私もそう思います！」

「もう一人の男は頼りないしね！」

そうだ。そうだ。というわけで一夏がんばれ

「じゃ！　俺はあきにぃを推薦する！」

「ぶざけんなぁ！」

つい大声を出してしまった。何人かはビックっと肩を震えた。怖がらせたみたいでごめん

「納得がいきませんわ！！」

俺より声大きいな。

「男がクラス代表なんていい恥さらしいですわ！　わたくしに、1年間そのような屈辱をあじわえとおっしゃるのですか？」

そうだな。確かに俺が代表になったら恥さらしだ

「大体、文化としても後進的な国に暮さなきゃならないこと自体、わたくしとっては耐え難い屈辱で――――――。」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

――――――おい

「なっ！　あなたわたくしの祖国を侮辱しますの！？」

「最初に侮辱したのはそっちだがな」

――――――あ。一夏と同じ間違いしちゃった。ってへ☆・・・・・うん。きもい

「っ！・・・・決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

のり上がった・・・さらに

「ハンデはどのくらい付ける？」

「あら？　さっそくお願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデつければいいのかなぁーと。」

とか言いあがった・・・一夏ボクシングや喧嘩じゃねぇんだぞ？

俺は呆れている中みんなは笑う。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのってＩＳができる前だよ」

それを聞いた途端一夏の顔がこわばった。ぜってー勘違いしてたなこいつ

「むしろ、私がハンデつけなくていいのか迷うくらいですわ。日本の男性はジョークセンスがあるのね。あなたはどう？」

・・・これが狙ったジョークなら一夏にはお笑いのセンスがあると思う。そして俺も標的に入ったようだ。

「動かず、射撃攻撃をせず、接近攻撃をせずならいいぞ。」

「それって的になれと言っているのではないのですか！？　誇り

はありませんの！？」

たぶん風に飛ばされてどこか宇宙まで行っているのではないのだろうか？

「じゃいい。ちなみに今のは俺のジョーク」

「織斑くん、今からでも遅くないよ。あいつの様にハンデつけてもらったら？」

「男が1度言ったこと覆せるか。なくていい。」

「なら話はまとまったな。それでは勝負は1週間後の月曜。放課後、第3アリーナで行う。織斑・木村・オルコットはそれぞれ準備しておくように。では授業を始める」

こうしてクラス代表者決定戦が開幕されるのだがさっきのジョークで俺にはずうずうしい・大声を出してしまったため乱暴者の印象が追加された。

その日の放課後、一夏が基本的なことを教えてほしいという事で残っているのだがそろそろ限界。

「あきにぃ。これはどういう意味なんだ？」

「えーとこれは「ああ、織斑くん、木村くん。まだいたんですね。よかったです」」

よかった。質問地獄から救われる。

「えっとですね。二人の寮の部屋が決まりました」

「あれ？1週間は自宅から通学してもらうって聞いてましたけど？」

「事情が事情なので一時的な措置として部屋割を無理矢理変更したらしいんです。」

「でも、荷物は一回家に帰らないと準備できないんで、今日はもう帰っていいですか？」

「それなら私がしといてやった。ありがたくおもえ」

着替えと歯磨き粉と歯ブラシぐらいしか入れてないと思うのは気のせいだろうか？

「「どうもありがとうございます・・・・」」

「まぁ、生活必需品だけだがな。着替えと携帯の充電器があれば

十分だろう。」

・・・・少し外れてしまったか。

「何だ木村？　言いたいことがあったら言え」

「・・・歯磨き粉と歯ブラシは？」

「あるが？　生活必需品と言っただろう」

虫歯には気を付けないとね

「これが寮のカギです。なくさないでくださいね」

「俺１０２５室だけどあきにぃ何号室？」

「１００１」

これ奥の方の番号だな。帰るのがメンドイ

「少し離れてるけど３年間よろしくな！」

「まぁ、今さらだけどよろしく」

そして、今俺は１００１と書かれた部屋の前にいる。その隣には

寮長室と書かれているが原作で誰だったけ？

もう前世の記憶のほとんどがなくなってきてるんだけど、大丈夫かな？

まぁ、いいや。

軽くノックをし、今度は強めにノックをする。

更衣中だったりして騒がれたら俺はもう寝れないだろう。そして返事がなかったため部屋に入り段ボールから寝間着を取りだしたが、相変わらず畳んでいなくてしわしわになっている。

着替えて、ベットにダイブして、０．００１秒よりも早く寝た。

当て馬として人気のセシリア・オルコット登場の巻（後書き）

次回「クラス代表決定戦」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7469y/

ＩＳに変革者・・・の怠け者

2011年12月24日03時48分発行